森の詩 Cantum Silvae
貴婦人の十字架
CHAPTER 1

Author : Yu Yaotome
Copyright@ 2015 Yu Yaotome

目次

プロローグ、黒衣の貴婦人
森をゆく - 『シルヴァの丸太運び』
《学友》の娘
マールの金の乙女の話
城と城壁の話
旅籠の娘
狩り
氷の宰相
村、農耕とフェーデ
城下
『カササギの尾』

プロローグ、黒衣の貴婦人

暗い中、少年は燭台の灯火を頼りに、ゆっくりと廊下を進んでいた。盆に載せた飲み物をこぼさないようにするのは至難の業だった。こんな用事を頼まれるのははじめてだった。マックスが、この国一番の賢者といわれるディミトリオスの下僕としてこの家に来てから、まだ一週間しか経っていなかった。

なぜここに居るのか、いまだに納得がいっていなかった。どうして彼がここに来なくてはならなかったのか。両親はそれほど金銭に困窮していたのか。だが、彼には質問も口答えも許されていなかったので、黙って言われたことをこなすほかはなかった。そして、召使い頭に言いつけられた通りに、慣れない動きで一階のディミトリオスの書斎に向かっているのだった。

目指す部屋のドアから、わずかに牛脂灯による光が漏れている。密やかに話す声も聞こえてきた。

「このようなむさ苦しいところにおいでいただくとは」

それは主人のディミトリオスの声だった。

「そんなこと、氣にもなりません」

客は女らしい、マックスは思った。

「誰にも見られなかったでしょうな」

「見られたとしても、どうだというのでしょう。賢者のあなたにギリシャ語を学ぶことは禁じられていませんわ」

「奥方さま」

ディミトリオスの声には明らかな非難の調子がこもっていた。女はわずかに咳払いをしてから、少し反省したような声を出した。

「わかっています。でも、私の氣持ちはわかっていただけるでしょう？八年も我慢したのです。どんなに苦しい昼と夜だったか、わかっていただけませんの？」

「さよう。しかし、もっと忍耐強くあらねばならないのです。おわかりでしょう。あなた様がこのようなことをお続けになるのであれば、私は計画を変更せねばなりませぬ」

「待ってください。お願い。後生です。どんなことをも忍びますから」

扉の前にとっくに着いていたのだが、いつノックをしていいのかわからなかった。だがその物音に氣づいた主人は短く咳をして貴婦人の注意を引いた。マックスは、今かとばかり短いノックをした。

「きたか。今、扉を開けるぞ」

主人の言葉に緊張して彼はまっすぐに立った。ドアが開いた。たっぷりとした灰色の長衣に身を包み、胸まで届く豊かな顎髭と真っ白い長髪の印象的なこの老人が立っていた。この館に連れてこられた日に会って以来、面と向かって主人の顔を見たのはまだ三回目だった。失敗はしたくない。

「お飲物を持ってきました」

「お持ちしました、だろう」

「あ、はい。すみません。お持ちしました」

主人は厳しい顔で立っていたので、マックスは今すぐにでも逃げ出したかった。しかし、主人は盆を受け取ってはくれずに、テーブルの方を示した。見ると向こう側にその女性が座っているのが見えた。

全身を黒で包んだ女性だった。顔には黒いヴェールがかかり、牛脂灯の灯りでははっきりとは見えなかったが、世間知らずの敬語もまともに使えない少年に怒るでもなくじっと黙って二人の会話に耳を傾けてい

た。
　彼は盆をテーブルに運び、カップをカタカタいわせてようやくこぼさずに貴婦人の前に置いた。
「ど、どうぞ」
「ありがとう」
優しく暖かい声だった。
「ご苦労だったわね。これは好きかしら？」
そう言って、貴婦人はマックスが運んできたすみれの砂糖漬け菓子を示した。少年は、目を輝かせた。先程、飲み物を運ぶように言われて盆を渡され、一緒に載っているその高価な菓子を一目見たときから、せめて一口でも食べてみることが出来たらどんなにいいだろうかと思い続けていたのだ。
　ディミトリオスは厳しい声で割って入った。
「奥方さま、それは困ります。他の使用人に示しがつきません」
　マックスの顔が落胆に曇った。ディミトリオスはドアをきっちりと閉めて、それから目で貴婦人に合図をした。貴婦人は頷くと、ヴェールを外し、口元に人差し指をあてて、少年の顔を覗き込んだ。少年の目にその顔がはっきりと見えた。真夏の空のように澄んだ青い瞳、金糸のように輝く髪、教会の聖母像のように美しい女性だった。その瞳がそっと微笑むと、彼の手に全ての砂糖菓子を載せてそっと手のひらを閉じさせた。そしてささやくように言った。
「誰にも見られないようにね」

森をゆく　―　『シルヴァの丸太運び』

　男たちは揃いのくすんだ赤い上着と黒い帽子、そして深緑のズボンを身に着けていた。その集団を目にしたのははじめてだった。『シルヴァの丸太運び』と呼ばれる男たちは、巨大なトウヒを切り出してはヴァリエラ川上流からサレア河に運ぶ専門の集団だった。男が両腕で抱えて手が届かぬ木を選び倒す。丁寧に樹皮を取り除き同じ長さの丸太にする。先に穴を穿つ。そして、力を合わせてヴァリエラ川に落とす。川に浮かぶ八本の丸太は穴に通された縄できつく結びつけられて筏が出来上がる。同じような筏が十二槽出来上がると、男たちはそれぞれ櫂になる棒を手に三人ずつ筏に乗り込み、そのままサレア河に合流するまでの舟旅が始まるのだ。
　マックスがどこから来たのかもわからぬ馬の骨で、樹を切り出す作業にも全く役に立たなかったにも拘らず、『シルヴァの丸太運び』たちに受け入れてもらったのは、この舟旅が危険を伴い少しでも多くの男手を必要とするためだった。途中の急流では、ほんの少しの油断で大の男がいとも簡単に川に投げ出されるのだ。
《シルヴァ》は深い森だった。鬱蒼とした針葉樹が山肌から続いている。平地に馬で何日もかかる道のりを進むのは非効率だった。誰もいなければそうする他はないのだが、『シルヴァの丸太運び』とともに川の流れに乗れば、わずか一日でヴァリエラまで到達することができるのだ。
　マックス・ティオフィロスが赤い上着を身に着けた年若い青年ステファノと意氣投合したのはエーゼルドルフ（ロバの村）というあまり麗しくない名前を持った小さな村の旅籠だった。彼よりもずっと上背があり、上着を脱いで現れた粗末なシャツからは盛り上がった筋肉のシル

エットが浮かび上がった。大きく口を開けて笑いこの辺りの旅人としては豪快に注文した。といっても金持ちがするように上質の酒や柔らかい肉などは全く頼まず、単純に量が多かった。
「腹をすかせては大仕事はできないからな」
ステファノは明日から始まる『シルヴァの丸太運び』のために二日かけてここまでやっていたのだと言った。普段は木こりや雑役として働いている男たちは、ひとたび『シルヴァの丸太運び』が始まるとの連絡を受けると誇り高き赤い上着と黒い帽子を身につけて各地から集まってくるのだった。マックスは隣のテーブルにいたが、興味を持って話しかけているうちに、ステファノの方からテーブルを遷ってきた。そして、マックスがその晩の二人分の勘定を払う代わりに『シルヴァの丸太運び』に参加させてもらうことになったのだ。
彼は櫂となる棒を渡されステファノの乗る筏に同乗した。途中の急流では投げ出されそうになるのを必死でこらえながら怒号の飛び交う中を水と戦った。
「馬鹿野郎！　流れを読め！　力任せにやってもダメだ！」
「バランスを取れ！　できないなら筏にしがみついてろ！」
「来たぞ！　渦だ！　ほら、そこ！」
何度か大人しく川沿いに旅をすべきだったかと後悔したが、渦と戦い、投げ出された仲間を助け、自分も数回落ちてがっちりとした手にしがみついている間に自分が『シルヴァの丸太運び』でないことも、ついていけるか不安だったことも全て消え去った。
誰が何を支払うかや、社会的身分のことは、この激流の上では全て消え去る。誰をどのくらい長く知っているか、どんな人生を歩んでいるかも。そこに存在するのは力と信頼関係だけだ。この丸太がどのような城のどの部分に使われるかも関係なかった。ただ、力を合わせてやるべきことをやる、それだけだった。それが『シルヴァの丸太運び』の仕事だった。
夕方にヴァリエラで降ろしてもらい、わずか一日で昔からの友のごとくに親しんだステファノをはじめとする同舟の男たちに別れを告げた時には、マックスはこの運搬に関われたことを生涯の誇りと思うまでになっていた。筏にくくりつけられていた荷物は完膚なきまでに水浸しになっていたがそれすらも誇らしかった。

彼はヴァリエラで馬を調達して《シルヴァ》を進んだ。この辺りまで来ると栗や椎などの広葉樹が柔らかい光を織り込むようになる。下草や苔に覆われた足下は動き回る小動物の氣配を伝えて、常に騒がしい。鳥の飛び回る羽ばたきに混じって常に耳に届くのはまだ近くにあるせせらぎのリズムある飛沫の音だった。
マックスが進んでいるのは、深い森の奥ではなくて、ほんの周辺部に過ぎなかったのだが、それでも、それから二日にわたって人影は全く見られず、この世に人は自分一人ではなかったかと錯覚した。
グランドロンは広大な王国ではあったが、その五分の一の面積は森が占めていた。あまりに浩蕩なため、この地は古代よりほとんど未踏の地であった。人々は名も与えずに、単に森を意味する《シルヴァ》と呼び、どの領主の支配下にも入っていなかった。人々は狩猟をし、生活のために必要な樹木や木の実それからキノコを取りにいくが、それは森のわずかな周辺部で行われていた。《シルヴァ》に接していたの

は、ルーヴラン王国に属するバギュ・グリ侯爵領、アールヴァイル伯爵領、ルーヴランの直轄地、いくつかの自由都市、未開の無法者の土地、そしてグランドロン王国の王都ヴェルドンならびに直轄地、ヴァリエラ公爵領、フルーヴルーウー伯爵領であった。

ヴェルドンを出て旅をはじめてから二年。老師に出て行く許しを請うた日のことを彼は昨日のことのように思い出した。

「まだ早い」

老師は言った。兄弟子たちが老師のもとから旅立ったのは、確かにもう少し歳を取ってからだった。だが、彼は十四年も師事してきて、兄弟子たちよりも知識にしろ経験にしろ勝っている自負があったのだ。

「年齢のことを仰せなのですか。私はもっと世界のことを知りたい。体力のある今こそ、精力的に世間を見て回るチャンスだと思われませんか」

老師を説得して、旅立つ許可をもらったものの、三年で戻って来いと言われて彼は不満を顔に表した。

「何故ですか」

「わしがいつまでも王に仕えると思っているのか。この老いぼれがくたばる前に、お前が王の補佐をし助けとなるように、どれだけ時間をかけて教育してきたと思っているのだ」

兄弟子の誰かが戻ればそれでいいではないかと思ったが、せっかくの旅出ちの許可を取り消されたくなかったので、それ以上は争わなかった。

マックスは森を進んだ。下草の中から突然現われて大木に駆け上るリス。馬が驚いて後ろ足で立ち上がった。彼は振り落とされぬように足踏みをしっかりと踏んだ。

「落ち着け。なんでもない」

彼は、馬をなだめながら、ふいに《ヴィラーゴ》ジュリアの伝説に思いを馳せた。百年前に伝説の男姫もこの森をこんな風に通ったのかもしれない。子供だったマックスにその伝説を話してくれたのは兄弟子だったか、使用人の誰かだったかもう憶えていない。

とある名のある侯爵家にはびっくりするほど美しいお姫様がいました。その姫様は女性の好きなことは全て嫌いで、男のような服を着て森をいつも駆け回っていました。そのため「男姫《ヴィラーゴ》」と呼ばれていたのです。姫君につけられていた馬丁ハンス＝レギナルドは、目も覚めるほど美しく、侯爵家の全ての使用人の女たちから慕われてたくさんの浮き名を流していましたが、本当は《ヴィラーゴ》ジュリアに恋いこがれておりました。ある時、姫君がお城を抜け出して愛馬とともに失踪すると、姫君を追って森へと消えてゆきました。ジュリアは森を住処とするジプシーたちに加わり怪しい旅をしたあげく、ついにグランドロンへと辿り着きました。グランドロンで国王に取り立てられ辺境の領地と伯爵の位を授けられていたハンス＝レギナルドはすぐに姫君に氣がつき、二人は結婚して幸福に暮らしました。

大きくなってからマックスはそれが史実であることを知った。《ヴィラーゴ》ジュリアは、隣国ルーヴラン随一の侯国バギュ・グリ

の令嬢だった。本当にジプシーの一員になっていたかは知る由もないが、確かに令嬢は侯爵のもとを逃げ出して、グランドロンへと辿り着きフルーヴルーウー伯爵夫人となったのだ。

彼はその《ヴィラーゴ》と反対の方向へと馬を走らせていた。グランドロンからルーヴランへと。王家がグランドロンの言葉や風習をよく知る教師を探しているという情報を得たのは、センヴリ王国に属するヴォワーズ大司教領であったが、王都ルーヴへと最短距離で向かうには《シルヴァ》の真ん中を突っ切る必要があった。そんな危険なことをするものは一人もいない。それで、彼は心ならずも、一度祖国と故郷である王都ヴェルドンにわずかに足を踏み入れ、そこから《シルヴァ》を川沿いに進みながらルーヴランの王都を目指すことになったのだ。

二年ぶりのグランドロンであったが、彼は王都ヴェルドンでディミトリオスを訪ねることはしなかった。旅をする氣ままな生活を続けるうちに、マックスは老師との約束を守るつもりはなくなっていた。兄弟子たちと違って彼は望んで弟子入りしたわけではなかった。グランドロン王に対する忠誠心も大してなかった。そもそも、若い王とはまだ一度も近しく接見したこともなかった。自由に旅をする。新しい土地へ行き、珍しい街並や風景を楽しみ、土地の酒と食事を堪能する。これ以上の人生があるだろうか。行く先々で軽く恋を楽しむ。けれどそれが深刻で重いものに変わる前に、彼はさっさと新しい雇い主をみつけて旅立った。

ルーヴにもそれほど長くはいないであろう。だが、王家で働くことが出来れば、その後に新しい仕事先を見つけるのも容易になるに違いない。

小川の流れが速くなった。木漏れ日が反射して瑞々しい光を放ちながら飛沫が踊りゆく。若駒は飛ぶように駆け出し、下り坂の道を急いだ。コマドリが急に飛び立ち、強い光を放つ森の出口へと誘った。

《学友》の娘

雪が完全に溶けると、ラウラはまた薔薇園に行くようになった。

ルーヴランの城の中で、彼女が一人で泣くことの出来る場所はあまりなかった。外を歩くとドレスの裾が汚れ、歩くのにもどのくらい時間がかかるかわからない冬の間は、建物から出ないほうがよかった。鐘楼にこっそりと登り街の終わる彼方を観てはため息をつくのが精一杯であった。

だが、ようやく長い冬が終わり、マリア＝フェリシア姫や城の人々から姿を隠すことができるようになったのだった。

薔薇は花ひらくどころか蕾すらも茎と見分けがつかぬ程に小さく固く、赤茶色のトゲだらけの茨が永遠と続くようにしか見えなかった。だが、この城で十二年の時を過ごしたラウラは、あと二ヶ月もすればこの同じ場所が香り立つこの世の楽園に変わることをよく知っていた。

彼女は待っていた。忍耐強く待つことだけが幸福への唯一の道だった。マリア＝フェリシア姫は悪い人ではないのだと思おうとした。ただ、ああいう立場に生まれてきて我慢することを、思いやりを持つことを学べなかっただけだと、好意的に考えようとした。彼女は頭を振った。どうでもいい、あと一年。そうしたら私は自由だ。姫は永久に黄金の檻からは出られない。私はどこにでもいける。鐘楼から見たあの地平線の向こう、深く謎めいた森《シルヴァ》の終わるところにも。

ラウラはふと左側の裾に目を留めた。赤い染みが出来ている。はっと左の腕を見る。美しく金糸で刺繍のされたゴブラン織りの覆い布の下に巻かれた白い木綿が真っ赤に染まり、そこから血が流れ出ていた。心臓がそこに移動したかのようにどくんどくんと脈打つ痛みに慣れすぎて、血が止まっていないことに氣がつかなかったのだ。頭を振ると、再び手当をしてもらうために城の中に入っていった。

「ラウラさま！　まあ、申し訳ございません。私の縛り方が弱かったんですね」

アニーが真っ青になった。ラウラは小さく首を縦に振ったが優しく言った。

「きつくしすぎると痛いと心配してくれたんでしょう？　ごめんなさい。氣づくのが遅れて裾も汚してしまったわ」

「まあ。すぐにお召しかえを用意しますね。こちらへどうぞ」

「あ〜あ。私も姫様付きになりたいなあ」

アニーが、ラウラの着替えを手伝って戻ってくると、リーザが汚れた包帯をさも嫌そうに洗っていた。

「なぜ？」

アニーは汚れたドレスを洗濯女たちに渡すときの手配書を書きながら訊いた。

「だって……。なぜ私がこんな洗濯をしなくちゃいけないのよ。パパがこれを知ったらなんていうかしら」

リーザは爵位こそないが、城下でも有数の商家の生まれで、何人もの召使いを使う家庭で育ったのだ。

「姫様や最高級女官のお世話をしてくれっていうからお城に上がったのに」
「その通りじゃない」
アニーはつっけんどんに答えた。
「そりゃ、ラウラ様の位は最高級だけど……」
リーザが言いよどむ。アニーは手を止めてリーザを睨みつけた。
「だけど、何よ」
「バギュ・グリ侯爵令嬢なんて名ばかりじゃない。どうして私がどこの馬の骨ともつかぬ孤児の汚い血を洗わなくちゃいけないのよ」
《学友》になるために、バギュ・グリ侯爵の養女となってから宮廷に上がったのだが、ラウラはもともと城下町の肉屋のみなし児であった。もちろん彼女は宮廷に来たかったわけではない。もし、彼女に選択権があり、自分に用意されているのがどんな生活であるか知っていたなら、むしろ街で物乞いになることを選んだであろう。バギュ・グリ侯が、ラウラと同い年の令嬢エリザベスを《学友》にしたがらずに、わざわざ誰からも望まれない孤児を養女にしたのも同じ理由からだった。
「ラウラ様の事を、二度とそんな風に言わないで！　貴族の家に生まれてこなかったのは、ラウラ様のせいじゃないわ。それに、優しくて、賢くて、振舞いも完璧で、あの方こそ本当の貴婦人だって、どうしてわからないのよ」
　アニーはこの城に勤めるようになってまだ二年ほどしか経っていないまだ半分子供の侍女だった。
　彼女にとってラウラはもう一人の王女と言ってもよかった。実際ラウラはこの城では唯一無二の特別な存在だった。彼女はただの女官ではなかった。女官と王女の間に存在する特別な存在――ラウラ・ド・バギュ・グリは《学友》だった。王女と同じことを学ぶ。外国語、文学、数学、楽器の演奏と詩作、行儀作法にダンス。女官としてももちろん機能した。手紙を書き、侍女たちへの指示を的確に出す。まだ二十歳になったばかりだが、家令ですらも一目を置くほどしっかりとしていた。
《学友》、それは百年ほど前に始まったルーヴラン王家の特殊な役職だった。最初の《学友》は、かの男姫ジュリア・ド・バギュ・グリだったといわれている。貴族の子弟が王族と寝食を共にし、全く同じ教育を受ける。王族は単に一人で帝王学を身につけるよりも、ライヴァルが近くにいる方が効率よく学ぶことができる。もうひとつの《学友》存在の必要性は、教育につきものの罰を王族には施せない問題を解決するためだった。王族の受けるべき罰は《学友》が引き受ける。通常、目の前で自分の受けるべき罰を友が引き受けさせられるのを目にすれば、王族は後ろめたさを持ち、自己克己に励むようになる。それは何不足なく育ち傲慢になりがちなルーヴランの王族にとって何よりも必要な帝王教育であった。
　だが、来月十九歳になるマリア＝フェリシア王女は、過去のルーヴランの王族とは違う感性の持ち主であった。そして、ラウラ・ド・バギュ・グリが、とるに足らない肉屋の孤児だという意識が彼女の残酷な考えを更に後押しした。王女は彼女が罰を受けるのを何とも思わなかった。むしろ、何もかも完璧にこなし、各方面からの賞賛を得る嫌みな娘に誰が王女なのかはっきりわからせたいという欲望を満たし

てくれるので、彼女が罰を受けるのを好んでいるところがあった。
先代までの《学友》はみな、楽ではないけれどさほど痛みのない罰を受けていたが、王女はそのルールを変えた。《学友》の利き手ではない腕を鞭で叩くことにさせたのだ。
ラウラの左腕は常に鞭で打たれ、引き裂かれていた。その傷の完全に癒える前に、次の鞭が当てられた。自分自身の振舞いが原因で鞭を当てられることはなかった。城に連れてこられた当初はわずかにあったが、今では全くなかった。王女の分だけで十分つらいのに、これ以上罰されるようなことはしたくなかった。彼女は何を教えられてもすぐに覚え、どんな仕事でも完璧にこなすようになっていた。

マールの金の乙女の話

夕方にマックスは《シルヴァ》の森を離れて、カルヴァに向かった。この小さな村には旅籠もなければ、馬の世話の出来るところもない。だが、グランドロン王国直轄領からルーヴランを目指すものならば必ず通ることになった。サレア河の宿場町であるマール・アム・サレアへと渡る、渡し守がいるからだった。
マール・アム・サレアは、サレア河の西岸にある三つのグランドロン領の一つであった。東岸はほぼすべてがグランドロン領であったし、西岸のほぼすべてがルーヴラン領であった時代もあるのだが、マールは少なくともグランドロン先王の時代に奪回された。
サレア河の西にあるルーヴラン王国の王都ルーヴに行くためには、どこかでサレアを渡らねばならない。渡し賃のことを考えれば、グランドロン人であるマックスにとってはグランドロン領で渡る方が都合がいい。他の二つの西岸の町が遥かに南に位置していることを考えると、ルーヴへと旅するグランドロン人がこぞってカルヴァで渡ろうとするのは当然のことであった。
まだ、春がやってきてさほど経っていなかったが、晴れて温度が上がったために汗ばむほどであった。常に《シルヴァ》の鬱蒼とした木陰の中を進んできた彼は、その強い陽射しを遮るもののない赤茶けた埃っぽい村の中を、多少不愉快に思いながら馬を進めていた。午後のさほど遅くない時間だが、村の家の戸はどこも閉ざされ、よそ者に無関心であるように思われた。それは単なるひがみなのかもしれないが、とにかくそう感じた。

一本しかない、村の道を西へと進んでいくと、やがてサレアの水音がして渡し場が近いことがわかった。マックスは、舟を見つけて渡し守のいるはずの小屋へと向かった。

渡し守は彼と馬をじろりと見た。それからぶっきらぼうに「待ってもらうよ」とだけ口にした。

「ごきげんよう」

ムッとしたマックスは、あえて正式の挨拶の言葉を口にして、客に対する礼儀をこの不遜な渡し守に思い出させようとしたが、それはあまり役に立たなかったようだった。河の渡し舟はサレア唯一の交通手段だった。その渡し賃はマールの町とその大権を握るサレアブルグ侯爵が決めており、保護されていた。従って、大して重要人物とも思えず、裕福な商人にも見えない若造一人に対して敬意を示す必要など全く感じなかったのである。もちろん彼はこの夕暮れまでにこの若造をマールへと渡してやらねばならなかった。さもなければ、彼が自腹でこの客の一夜の宿と夕食ならびに朝食を用意せねばならぬ決まりになっていたからだ。だが、夕暮れギリギリまで待って、他に三人ほどの客が集まるまで待って悪いことがあるだろうか。まだ陽は高いのだから。

マックスはしかたなくあたりをぶらぶらして過ごす事になった。話しかける相手も自分の馬を除いたらその渡し守しかいない。いけ好かない男だが、退屈していたので縄をなっている渡し守に世間話をしてみた。

「ときに、あの向こう側に見えている町外れの大きな建物は何かね」

渡し守はちらっと川向こうを眺め、それから再び縄をなって答えた。

「女子修道院だよ。でかいけれど、今はがらんどうさ。」

「なぜかね」

「数年前に、あの修道院で流行病があってね。感染を怖れた街の連中が、閉じこめたんでさ。そのために多くの尼僧が医者にもかかれずに死んだ。今では生き延びた尼僧と、その後に入った女たち、全部で十五人くらいしかいないって話だ」

「痛ましい話だ」

渡し守はちらっと彼を眺めたが、同意した様子はなかった。流行病をまき散らされるのはごめんだと思っているのだろう。

しばらく待っていると、立派な服装に身を包んだ恰幅のよい男が下男を連れてやってきた。青く重みのある外套の下には明るい緑色の上着が見えている。

「渡してもらいたい」

そして、通常の三倍の賃金を渡し、二頭の馬を顎で示した。

「よござんす。舟を出しましょう。さあ、旦那も乗りな」

渡し守は、氣前のいい男と下男、そして二頭の馬を舟に乗せると、マックスとその馬も続けて乗せた。

舟が動き始めて渡し守に余裕ができた頃を見計らって、マックスは話しかけた。

「マールは初めてなんだ。さほど高くなく清潔でうまいものの食べられる旅籠を知らないか」

渡し守は鼻で笑った。

「何度も訪れて自分で確かめるんだね」
　貴族と思われる裕福な男は渡し守の横柄な態度をじっと見ていた。
「野うさぎ屋という旅籠があります。もう二十年近く前に泊まりましたので代替わりしているやもしれませんが試してみるといいでしょう」
　男の言葉に下男はギョッとした顔をしたが、何も言わなかった。マックスはなぜこのように位の高そうな紳士が安宿などを知っているのだろうかといぶかった。
　一方、男の方も似たようなことを思ったらしかった。
「旅のお方、身軽な服装に似合わぬ身のこなしと、発音ですな。お生まれがお高いのでは」
「いえ、そうではありません。教師として宮廷を渡り歩く身ゆえ若干の礼儀作法を心得ているだけです。申し遅れました。私はマックス・ティオフィロスと申します」
「そのお名前に、宮廷での教師とは……もしや賢者ディミトリオス殿の……」
「はい、弟子です」
「そうですか。賢者殿がこのようにお若いお弟子をお持ちとは」
マックスは笑った。職探しのためにどこで師事したかを証明すると必ず同じことを言われる。
「では私も名乗りましょうかな。私はヨアヒム・フォン・ブランデスと申します」
すぐ近くにいる者にははっきりと聞こえるが、水音をさせて舟をこいでいる舳先の渡し守には聞こえない程度の声で男は言った。マックスは耳を疑った。
「というと、ランスクの？」
「やはりご存知でしたか。そう、代官をしております」
　ランスクは大きな所領ではないがグランドロンでも有数の塩田があり、代官のヨアヒム・フォン・ブランデスは子爵の家柄ながら国王にも謁見が許されている名士だった。その当人がさほど遠くないもののこのようにわずかな伴を連れるのみで旅をしているのはいかにも不自然に思われた。
「殿様、あなたがいったいどうして……」
マックスが声を潜める。
　ヨアヒムは笑った。
「何故、このようなところに忍びの旅をしているのかと……」
それは奇妙な笑い方だった。あざ笑うような、少し悲しいような表情だった。
「そうですな、それではこの川を渡り終えましたら、若き賢者殿に私の話を聞いていただきましょうか……」
そして、ちらりと水手を見た。
　不遜で、ずる賢い目をした渡し守は話を聞けないことに残念な顔をしたが、黙って川を渡りきった。
　下男に馬を頼み、並んで歩きながらヨアヒムは語りだした。
「わがブランデス家は、ご存知のように名門ではありません。私が若いころは、このように身分を隠してではなく、あなた様のように自由に出歩く事も可能だったのですよ。誰もそれを咎めたりはしませんで

したし、私は館での単調な生活に退屈しきっていましてね」
　マックスは黙って頷いた。ヨアヒムが異例の出世をした影には、ヴァリエラ公爵家の後ろ盾があることは知っていた。現公爵の従姉妹にあたるヒルデガルト・フォン・ブランデス＝ヴァリエラと結婚した後、ヨアヒムは公爵の縁者として王家の狩りやサレア河のヨハネ水浴祭で貴婦人たちの警護を務めて名を知られるようになり、瞬く間に出世したのだった。
「野うさぎ屋に泊りましたのは、まだ身ひとつの頃でした。大した家でもないのに堅苦しい宮廷作法を強制する親に反発したかったんですな。こっそりと逃げだしてひとり当てもなく旅をしたのですよ」
　若き日のヨアヒムはわずかな荷物と馬だけを連れて、サレアを渡り、はじめて西岸へと足を踏み入れた。河を一つ越えただけなのに、言葉が変わり、人びとの生活ぶりも変わっていた。楽しく開けっぴろげな人びとと接して、彼はこの地の方が自分には心地がいいと感じた。家から持ち出した小さな財布に入った金で、驚くほど面白おかしい旅ができた。酒を覚え、女も楽しんだ。
　だが、酒場の定食の支払いに山羊一頭が買える銅貨を使ったりすれば、直に良くない者たちに目を付けられたのも当然の事だった。ヨアヒムは強い酒で酔わされた後、何者かに殴られたあげく、身ぐるみ剥がされて森の入り口に放り出された。
「死に損ないの私を助けてくれた男がいたのですよ」
森の小さな小屋には、貧しい木こり男とその娘がひっそりと住んでいた。男はヨアヒムを家に運び、寝台に寝かせた。娘がせっせと世話をして、怪我が良くなるまでずっと側にいてくれた。ヨアヒムがちゃんと立って、家の用事を手伝えるようになるまで数ヶ月がかかった。
「退屈だった事でしょう」
マックスが訊くと、ヨアヒムは頭を振った。
「その娘は朗らかで、氣だてが良く、料理がうまく、私には天使のように思われました。本当に後光が射しているかのようでした。本当に美しい、輝くような金髪でしてね。私は《黄金の乙女》、《金色のベルタ》などと呼んでいたのですよ」
　マックスは納得して少し笑った。ヨアヒムははにかむように笑うと話を続けた。
「私がそろそろ旅立とうとした時に、ベルタの父親が伐採中の事故で命を落としましてね。突然ひとりぼっちになってしまったベルタは泣きました。それで私は旅立ちを遅らせて、しばらく優しい娘と共にいようと思ったのですよ」
　遠からず祝言こそあげていないもの、夫婦のように過ごす事になった。ヨアヒムは木こりの見習いとして働き、ベルタは家庭を守った。数ヶ月だが楽しい日々だった。
「それが、ある日家に戻ったらベルタが消え失せていたのです」
ヨアヒムは眉に皺を寄せて、髭をしごいた。
「かわりに私を待っていたのは、ヴァリエラ公爵家に仕えているとある騎士でした。ブランデスの家とともに私を探していたが、偶然酒場で紋章のついた帽子を被った者を見つけて問いつめた所、殴ってこの森のあたりに捨てた事を白状したというのです」
「それで？」

「私はベルタはどうしたのだと訊きました。そうしたら、事情を説明した所、娘は身分違いを恥じて出て行ったというのです。もちろん、私は騎士の制止を振り切って、近くを探しました。二日二晩、ずっとベルタを探しました。けれど、見つからなかったので諦めて騎士とともにこの地を去ったのですよ」
　マックスは頷いた。ヨアヒムは続けた。
「実をいうと、私は家に帰りたかったのです。木こりの仕事は私にはきつかったし、働いて食べて寝るだけの生活も退屈に思えましたしね。ベルタがいなくなってしまった以上、そこにいる必要も感じませんでした」
　そして、縁組みの進んでいたヴァリエラ家のヒルデガルト姫と結婚した。子宝にも恵まれ、ヴァリエラ公爵の後ろ盾もあってとるに足らない家柄の子爵だったのが国王に謁見を許されるまでに出世した。
「それで？　ここにいらしたのは？」
マックスが訊ねると、ヨアヒムは髭をしごいた。
「ヒルデガルトが先日急な病で命を落としましてな」
　マックスは驚いてお悔やみの言葉を言った。それを「いいですから」と手で制してヨアヒムは先を続けた。
「最後の晩でした。終油の秘蹟をと大司教に来ていただいているというのに、どうしても他の者を追い出して私と二人だけで話がしたいというのですよ」
　ブランデス子爵夫人ヒルデガルトは、全ての他の者が部屋から出ると夫の手を弱々しく握りながら言った。
「あなたにお詫びしなくてはならない事があります」
「なんだね。お前は常に私の良き妻であり、子供たちの立派な母親だったではないか」
「そうなる前の事です。あなたがマールの森のはずれで木こりとして暮らしていたとき、騎士に命じてあなたの愛していた女を連れ去ったのは私なのです」
「なんだって？」
「私は、どうしてもあなたを失いたくなかった。だから、あの娘を強引にあなたから引き離したのです。この罪をどうしてもあなたには打ち明けられなかった。あなたがあの女のもとに行ってしまうのではないかと怖かったのです」
「もういい。過ぎた事だ。私たちは二十年もの間、夫婦として暮らしてきたのだ。私はお前のした事を許すし、いつまでもお前の夫でいるよ」
ヨアヒムがそういうとヒルデガルトはポロポロと涙をこぼし、せめての償いに彼女が亡くなった後はベルタを迎えにいって、相応の地位に就けてやってほしいと頼んで息を引き取った。
「それで、私は妻の告白した通りに、あの修道院に押しこめられたベルタを訪ねようとしているのです」
ヨアヒムが指差したのは、さきほど対岸からはっきりと見えていた、大きな女子修道院だった。
「ティオフィロス殿。よかったら私と一緒に修道院へ行っていただけませんか。私はルーヴラン語ができると言ってもあなたほどうまくない。ましてや修道女たちは方言を話すかもしれない。通訳がいてくだ

さると心強いのですよ。お礼に、今夜はいい宿屋に私がご招待させていただきます」
悪くない話だったので、マックスは同意して修道院へと向かった。
近くに寄ってみると、その修道院は半分崩れかかったかのようだった。壁にはあちこちに蜘蛛の巣がかかり、墓地には雑草が生えて墓石も崩れていた。下男が大きくノックをすると、中から若い修道女が顔を出し、用件を院長に伝えるために中に引っ込んだ。そのまま四半時ほど誰も出てこなかった。忘れられたのか、それとも故意に無視するつもりなのかと訝りはじめたころ、再び入り口が開き、先ほどの修道女がどうぞ中へと言って、三人を門の中に入れた。下男と三頭の馬を庭に残し、ヨアヒムとマックスは応接室に案内された。古い椅子に座って待っていると、静かな音をさせて黒い布のベールと白い尼僧衣を身につけた女が入ってきた。
「お待たせいたしました。私が修道院長でございます。どなたかをお探しとの事ですが」
四角く厳つい顔をした初老の女で、眉間にくっきりと刻まれたの縦皺が印象的だった。艶のない、ざらざらとした肌にはたくさんのしみがあり、口元はへの字型に下がっていた。そして、すこししゃがれたような低い声で話した。
「今から二十年ほど前に、ヴァリエラ公爵付きの騎士がお連れしたベルタという名の尼僧を捜しているのです。歳の頃は現在三十七、八というところでしょうか」
「はて、存じませぬ。ご存知かもしれませぬが、この修道院には七年前まで百人以上の尼僧が生活しておりましたが、現在残る十六名を除いて、全て流行病で命を落としました。私は生き残った者の中で最年長でしたので、このように急遽院長を仰せつかりましたが、二十年前に誰がどうしたかを知っていた、高位の修道女の皆様はどなたもおられません。また、流行病が広がらぬように、衣類や書類などのほとんどが焼かれてしまったのです。お探しの尼僧はどのような容貌の娘でしたか」
そう訊かれると、ヨアヒムは少し考えた。
「きれいな若い娘でした。輝くような金髪で、そうですね、あなたのような水色の美しい瞳をしていました。ただ、そういわれると、どんな顔だったかはっきりとは思い出せない。肌がきれいだった事や、髪が美しかった事ばかり思い出す」
修道院長は、小さい低い声で先ほどの若い修道女を呼ぶと、何を命じた。やがて、応接間に三人の修道女がやってきた。四十くらいの修道女で、一人は背が高く、一人は背が低く、もう一人は小太りだった。
「こちらの殿様が、ベルタという名の金髪の修道女を探しているのです、あなたたちのうちの誰かがそのベルタですか」
それを聞くと三人は揃って頭を振った。それから何か言いたげに修道院長の厳しい顔を見たが、修道院長はさらに口角をさげて「行ってよろしい」とだけ言った。それからヨアヒムに向かって一礼をして言った。
「お氣の毒ですが、現在この修道院には、あなたのお探しの女性はいないようです。例の流行病か、もしくは、ここに来てすぐに命を落としたのでしょう。どうぞお引き取りください」

ヨアヒムは礼を言って、いくらかの寄進をすると、マックスと下男を連れて修道院を後にした。
「残念でしたが、これですっきりしました。こんなぞっとする所に、ベルタがいたのは氣の毒でしたが、まあ、生き残ってあの恐ろしい婆院長にこき使われるよりはマシでしょうね。ティオフィロス殿、本当に助かりました」
そういうと、約束通りマールで一番評判のいい宿屋にマックスを案内すると、丁寧に別れの挨拶をして、日の暮れぬうちに再び東岸へ渡してもらうべく、下男と馬に乗って去っていった。

マックスは、荷物を解きながら、先ほどの修道院での出来事を考えていた。いくら百人以上の修道女がいたからと言って、誰もその女の事を知らないなんてことがあるだろうか。それにあの三人の女たちの態度が氣になる。もしかして、《金色のベルタ》は「誰が訪ねて来ても隠せ」と言われているのではないだろうか。そう思えば思うほど、いても立ってもいられなくなってきた。
彼は宿屋から出ると、再び修道院に向かう丘へと登った。正門から訪ねて行っても、同じ事になるだろうから、裏から入れないかと壁際に少し歩いた。丘の裏手は小さな林となっており、小川の流れがチョロチョロと響いていた。裏口が見つからず、反対側を見るために戻ろうと踵を返した所、不意に川の流れに混じって女のすすり泣きが聞こえてきた。彼は、急いで声のする方に向かった。
小川の向こうに小さな池があり、先ほどの尼僧たちと同じ服を身につけた女が背を向けうずくまって泣いていた。黒いベールを脱いで、髪を梳かし池に自分の姿を映していた。豊かな金髪が木漏れ陽を受けてつやつやと輝いていた。
「あなたが《金色のベルタ》なのですね。あの修道院長は嘘を言ったのですね！」
マックスが叫ぶと、女ははっとして、それからゆっくりと振り向いた。その顔を見て、彼は「あっ」と言って立ちすくんだ。女はもっと激しく泣き出したが、彼は何と声を掛けていいかわからなかった。
それは先ほどの修道院長だった。

しばらくすると、女は泣き止み、低い声で語りだした。
「どうして、目の前にいるのにわからないのだろうと思いました。でも、この顔をみてわかるはずはありませんよね。こんなに醜く、年老いて……」
水鏡には皺のたくさん刻まれた疲れた女が映っていた。
髪を三つ編みに結い、再びベールを被り、涙を拭うとベルタは立ち上がった。
「はじめの頃、いつか迎えにきてくださるようにと、神に祈りました。それがかなえられなかったと思うと、奥さまを恨みました。なぜ私だけがこんなひどい目に遭うのだろうと、不満に思いました。前の院長や先輩の尼僧たちに、結婚もせずに男を知った穢れた女と蔑まれ、厳しくあたられました。神父や院長たちが嫌いで、他の修道女たちも嫌いで、後輩には同じように厳しくあたりました。七年前の流行病で祈りも虚しく、皆がバタバタと死に、閉じこめられて自分も病にかかる恐怖に怯え、祈っても無駄なのだと思いました」

マックスは何かを口にすることはできなかった。ベルタは、ひとり言のように続けた。

「迎えにきてくださった。祈りを神は叶えてくださった。でも、その時にふさわしい朗らかで氣だてのいい《黄金の乙女》は消え失せていました。私はこの二十年間、祈りと信頼の代わりに、怒りと猜疑心をこの顔に刻んでしまった。なんて愚かだったのでしょう」

肩を落として、修道院へと消えてゆくベルタの後ろ姿を見ながら、彼はやりきれない想いに襲われた。ヨアヒムの探していた氣だてのいい乙女とこの女はこれほどまでに違っていた。その責は二十年という時間だけにあるのではなかった。この女の生きた日々を思えば、修道院にいつつ神を信頼しなかったことを責めることもできなかった。そして、それを神の罰と断じるのはあまりにも悲しかった。この崩れそうな修道院で、全ての望みを絶たれ、厳格で年老いた尼僧として生涯を終えるだろう金色の乙女。彼は首にかけている黄金の十字架をぎゅっと握りしめた。

城と城壁の話

ルーヴの街を遠くから見ると、それは大きな一つの固まりに見えるが、実際には城は街とははっきりと隔てられた世界だった。街そのものも大きな円塔を備えた門が三カ所ある防壁に取り囲まれているのだが、もっとも北側にある王城は背後の北側を除いて強固な城壁と水を張っていない空堀と水を張った濠に囲まれて街からは跳ね橋を通してしか入る事ができなかった。ルーヴの北側は絶壁で自然の要塞となっていた。

その強固な守りは、一方で外敵の侵入から城に住まうものを守ったが、他方で城からほとんど出た事のない世間知らずな者たちを作った。城の中に入ると人びとが活発に行き会う外庭があった。そこは小さな街の様相をなしていて、木造の家が並び、動物や馬車が行き交い、指物師、馬具工、陶工などの職人たちや、農作物を運び込む農民たち、水を汲んだりパンを焼いたりする人びとでいつも賑わっていた。城の使用人たちやその子供たちが生活をしていたのだ。

その内側には門を通ってしか中に入れない石造りの建物があった。これは地上は三階建てであり、大小の入り組んだ部屋と天守閣を含む四つの塔、礼拝堂、それに大きな二つの中庭といくつかの小さな庭を囲んでいた。一階および何層かに分かれた地下は使用人や兵士たちが作業し住む空間となっており、二階は大広間をはじめとする城の公の空間、そして三階が王族や貴族、そして高官や女官たちの住居となっていた。

ラウラもこの三階に部屋を与えられて暮らしていた。王と王妃や王

女の部屋ほどではないが、最高位女官であるバギュ・グリ侯爵令嬢として相当の広さと豪華さだった。ただ、調度や飾りが最小限で、品はいいもののあっさりしすぎている感があった。王女の部屋が色鮮やかな南国の鳥の羽根や、宝石、金銀、手のかかった織物や東から運ばれてきた絹などであふれかえっているのと対照的だった。

たくさんの楽器や詩や物語を綴った羊皮紙が散乱する姫の部屋では、ラウラにつけられた三倍の侍女が毎日片付けに精を出しているにも関わらず時おり物がどこにあるのかわからなくなったが、彼女の部屋では侍女は掃除はしても片付けをする必要はなかった。本も、楽器も、衣類も全てが正しいところから取り出されて、使用後は正しい場所にしまわれた。美しいだけで役に立たない物などはまったくなかった。これはラウラ本人の性格にもよるのだが、バギュ・グリ侯爵をはじめとして誰一人として「だだ喜ばせるためだけ」に彼女に何かを贈る人がいなかったからだ。

自由な時間、ラウラは書物を読むか、楽器を奏でるか、もしくは庭を散策するなど一人でいる事が多かった。マリア＝フェリシア姫の近くに来る事はほとんどなく、それがますます姫との関係に溝を作った。

ルーヴラン王国の国土は、偉大なるアンセルム三世の時代と較べると四分の三ほどの大きさとなっていた。といっても、ほとんど未開の地である深い森《シルヴァ》を含めての比較である。現国王であるエクトール二世には、兄の急逝によって突如として王冠が転がり込んできたため、帝王教育もなされていなければ国土を奪回するための覇氣もほとんどなかった。実際に王妃はアールヴァイル伯爵の次女でしかなく、側近も大して力のあるものがいない。そもそもルーヴランがこの百年に次々と国土を失ったのは、隣国グランドロンの辣腕な政治力と軍事力によるものであった。

マール・アム・サレア、サレア河の西岸にある街は三代ほどルーヴランの手にあった。そのため、現在でもかの地ではルーヴラン語が話されている。この街はグランドロン先王フェルディナンド三世によって奪回され、現在はグランドロン領だ。そして、ペイノードのことがあった。

ペイノード、またはノードランドと呼ばれる土地は、ドーレ大司教領の東にある。その名が示すように北の外れにあるにもかかわらず、暖流がノーラン湾に流れ込み、またフェーン現象も起こるために比較的温暖で穀物がよく穫れる。山岳地帯には鉄鉱床がありさらに海岸では良質の海塩が産出される。もともとは、この土地に住む人びとの言葉でノーランと言われ、王家の支配下にある場合もノーラン人の代官による半自治を確立している特殊な土地である。

古くは現在のヴァリエラ公爵の祖先にあたるギョーム・ヴァリエラによって開拓され、計画的な鉄採集や製塩が始められた。グランドロン、ルーヴラン両王国との自由交易をしていたが、三代前のアウレリオ・ヴァリエラがグランドロン配下に入り公爵位を賜った。これに不服を申し立てルーヴランがグランドロンに宣戦布告をした。結果はほぼ引き分けで、ルーヴランが三分の一にあたる西ペイノードを、残りをグランドロンのヴァリエラ公爵がノーラン人のロートバルドを代官として支配することとなった。ルーヴランはヴァリエラ公爵を承認するのと引き換えにノードランドとの自由交易権を保持することと

なった。だが、グランドロン先王フェルディナンド三世は、西ペイノードを奪回してノードランド統一後、ルーヴランとの自由交易を禁止した。

五年前にフェルディナンドが急逝すると、ルーヴランはこれが好機と、戴冠した若きグランドロン王レオポルド二世に宣戦布告して、一時西ペイノードを得たが半年後に再奪回された。その後、若きグランドロン王はことさら軍事増強に力を入れているとの噂でルーヴラン王の心は穏やかではなかった。

そのエクトール二世のもとに、二年ほど前に自ら売り込みにきたのが、ドール大司教の腹心であったイグナーツ・ザッカであった。ザッカはもともとルーヴラン人ではなく、隣国センヴリの出身であったが、聖職者となってドールに遷り、その非凡な頭脳と政治力で瞬く間に大司教の目に留まった異例の経歴の持ち主であった。

ルーヴランの宮廷に来てからは、宰相ギュスターヴ・ヴァンクールのもとで補佐をしていたのだが健康きわまりなかった宰相の突然の死に伴い、半年前に宰相の座に登り詰めたのだった。聖職者の面影を残すのは、常に着用する黒いベルベットの衣装だけで、その冷徹な振舞いから《氷の宰相》と陰で呼ばれるようになっていた。

「ド・ヴァランス夫人が宮廷奥総取締役を退かれた経緯を知っている？」

ラウラ付きの侍女リーザは噂話が好きだ。ゴシップを話しているとラウラに嗜められるので、彼女が部屋にいない時にはここぞとばかりにまくしたてる。

「ヴァンクール様ととても親しかったからでしょう。その、つまり、単なる友情以上にってことだけれど」

「やっぱりそうなの？　でも、あの方にも夫君がいるんでしょう」

「ご主人は田舎貴族で、影が薄いの。夫人がヴァンクール様のお引き立てで宮廷奥総取締役に就任してからやっと国王陛下にお目通りが叶ったって体たらくだったもの」

「ヴァンクール様が亡くなられて夫人の形勢が悪くなった後も、離縁する事もできないみたい」

「ド・ヴァランス夫人が退かれて、姫様はご機嫌が悪いのよね」

アニーがそっとつぶやいた。侍女たちは目を合わせて頷く。世襲王女には、宝石やダンスの他にもっと大切な事がたくさんある。十六になってから、姫は領地と年貢の管理や、直轄領における裁判、それに宗教行事など国王の仕事のほとんどに同席する事を求められた。彼女が好んだのは東方や南方からの珍しい品々を運んでくる上納品の確認だけで、あとの多くについては、ありとあらゆる理由をつけて避けようとした。宮廷奥総取締役であったド・ヴァランス夫人は自分の立場を強固にするためには誰を味方に付ければいいかよく知っていたので、姫の都合のいい口実を次から次へと生み出しては表方に奏上した。夫人と「非常に親しい」宰相がこれに反対するはずもなく、姫君は好き勝手を通す事ができていたのだった。

ところが、《氷の宰相》が夫人を上手に厄介払いしてからは、勝手が違ってきた。新たに奥総取締役に任命されたのはアールヴァイル伯爵家の遠縁にあたるベルモント夫人だった。厳格な性格の上、娘のわ

がままに手を焼いていた王妃と親しい事もあり、姫の自由はかなり制限される事となった。さらに、公の場で《氷の宰相》が、姫の無知をさらさないように骨を折る事がなく、何度か恥ずかしい目に遭わされていたので、王女はザッカを毛嫌いしていた。

　それゆえ、どうしても自分が出向かなくてはならない場合を除き、姫は宰相に会う用事をことごとくラウラに押し付け、さらに政が行われている場にも同席し攻撃の矢面に立たせようとした。それで本来は政治や軍事に関わる必要のないラウラが宮廷の表によく顔を出す事になっていた。

「国王陛下はザッカ様をずいぶん信頼なさっているのよね。どんどん改革を進めていらっしゃるけれど……」

リーザは声を潜める。

「それに何の問題が？」

「財政の緊縮、いよいよ私たちの所でも始まるみたい。まあ、姫様のお買い物が主なターゲットだと思うけれど」

「ラウラ様のお手当は減らされないわよ。だって、もともと必要最小限の物以外はほとんどお買いにならないんですもの」

「そうかしら。里下がりの時の特別手当を削られたら嫌だなあ」

侍女たちは三ヶ月に一回一週間ずつ里下がりが許されている。明日はリーザとアニーの番だった。アニーはちらっと冷たい眼でリーザを見た。

「いただいているお手当の他に、毎回このお部屋からお菓子を根こそぎ持っていっている人がよくいうわよ」

「あら。ラウラ様が召し上がらないんだもの。悪くなるよりいいでしょ」

「あのね。里下がりする子は他にもいるんだから、ちょっとは考えなさいよ」

　そう言いあっているうちに、扉が開いてラウラが戻ってきた。

「何の騒ぎ？」

「い、いえ、なんでも」

アニーもリーザも顔を赤くしてうつむいた。他の侍女たちはくすくす笑っている。

　ラウラは高杯の上に山盛りになっている果物を見て言った。

「これをも二人で分けなさい。お家の方によろしくね」

それから、手にしていた本を広げて窓辺に座った。

　アニーはそのラウラの横顔を見て、急に申し訳なくなった。両親のもとではなくて叔母の家とはいえ、少なくともアニーには帰る家がある。でも、ラウラはどこにも帰れないのだ。表向きはバギュ・グリ侯爵家が彼女の実家だが、誰も彼女が戻ってくる事を望んでいなかった。彼女は他の女官たちのように里下がりをする事がなく常にこの城の中にいた。城壁の外に出られるのは、彼女がこの城から出て行く時だけなのだろうと思うととても切ない氣持になった。

「来週の日曜日、そんなに遅くならずに戻って参ります」

アニーが少し思い詰めた様子で言うと、ラウラは本から眼を上げて不思議そうにアニーを見た。

旅籠の娘

たったひとつ川を超えただけというのに、どうしてこのように変わるのだろう。マックスは久しぶりにルーヴランに足を踏み入れてつくづくと感じいった。旅籠にはたくさんの男たちと娘たちが集っていた。彼らは衣食が足りて有り余っているようには見えなかった。男たちの上着はすり切れていて、色あせていた。女たちのショールも荒いウールの平織りであった。しかし、彼らは愉快で、わずかな酒や料理を実に楽しんでいた。卑猥な冗談が飛び交い、女たちは明るくそれを笑い飛ばしていた。

グランドロンでは滅多に見られない光景だ。あそこでは、まず女たちは料理屋に足を踏み入れたりはしない。きちんと家庭を保つ事、厳格ですました態度こそが好ましい女の姿だった。男たちも、黙ってカードゲームに興じるか、厳しい顔で収穫の事や疫病の事などを低い声で論じるのがぴったりした。

彼はいくつもの言葉を自由に扱う事が出来た。言葉を切り替えると、自分の性質までもが少し変わるように思える事がある。ルーヴランの言葉は柔らかく韻律に富んでいる。詩や愛のささやきが似合う。グランドロンの言葉は硬くはっきりとしている。そう、法律や論理を論じるのに適している。人々の態度も、その言葉に支配されているようだ。陽氣で感覚を優先するルーヴラン人と勤勉でまじめなグランドロン人。もちろん、個人差はある。だが、一般的な両国の国民性にはこのようなイメージがついてまわっている。彼は、明らかに典型的なグランドロン人ではなかった。それだけに、この軽やかなルーヴランの人々の様子は好ましく思えた。

角の席に座っていた若い娘が、体を斜めにねじって、マックスの方を物欲しそうに眺めた。例えば大司教領など、教会の力の大きい所では、女がこのような公の場であからさまに誘ってくる事はない。亭主が長いこと不在で身を持て余している女ならまだしも、あきらかに未婚と思われる服装の娘が酒の出る場に出入りしているだけでなく、見ず知らずの男に誘いをかけてくる。いったいどういう事なのだろう。もしかして、服装は生娘のようだが、体を売って生計を立てている女なのではないだろうかと思った。

「親爺、こちらにもう一杯ワインと、それから水をまわしてくれないか」

彼はルーヴランの言葉で頼んだ。それを聞いて、周りの男たちが明らかに意識して彼に注目した。

「旅のお方よ。あんたは、どこから来たのかね」

斜め前に座っていた相席の男が口を開いた。

「サレアの向こうからだが、なぜかね」

「あんたが宿の主人に話しかけたからさ。あんたはあの娘に注文しなくてはいけない。見なかったかね。あの娘がさっきからあんたにしなを作っているのを」

マックスは意味が分からなかったので、首を傾げて返事をしなかった。それで男は声を顰めて付け加えた。

「いいかい、ここでは客が今夜一緒に寝る女を決めるんじゃない。女の方が客を指定するんだ。そのかわり娘に選ばれた客の世話はすべて娘自身がするんだよ」

「そんな事を言われても、こっちにそのつもりがない時だってあるだろう。ものすごく醜い娘に選ばれたらどうするんだい？」
男は肩をすくめた。
「寝るか、野宿するか、選択肢は二つしかないんだよ。もう夜も遅いし」
そんな話をしているうちに、件の娘がワインの入った水差しと木のコップに入った水を持ってマックスの前に座ると、ちらっと相席の男を眺めた。男は笑うと、自分の盃を持って娘の座っていたテーブルへと遷っていった。男たちがどっと笑うと、再び何もなかったかのように、それぞれの食事やゲームや討論に戻った。

「マリエラよ。こんばんは」
「僕はマックスだ。ずいぶんと変わった風習の街なんだね」
マリエラと名乗った娘は、クスッと笑った。絶世の美女というのではないが、ご免こうむるというほどの容貌でもなかった。ほんの少し目の形が小さくてアンバランスだが、笑う時に出るえくぼは魅力的と言えなくもなかった。わざとやっているのだろうが、少しだらしなく広げた襟元から胸の谷間が見えている。だが宮廷で見る娘たちと違って肌はかさつき、鎖骨が痛々しかった。
「この一帯で、私たちが働けるのはこの街だけなの。そして、私たちは専門的に旅人を接待することになっているのよ。あんたが今夜の最後の旅人。さっき宿代を先払いをしちゃったでしょ。あの親爺は一度受け取った金は死んでも返さないから、私と一緒に暖かい布団で眠っても、外で凍えても、あんたは同じ値段をこの旅籠に払う事になるってわけ」
「そして、君が夜中に僕の荷物をごっそりあさって朝までに消えてしまうって算段かい？」
「馬鹿なことを言わないで。私たちの仕事は信用第一なの。あんたが次の行き先で身ぐるみ剥がされたなんて言ったら、この街を通る旅人がいなくなってしまうじゃない。ねえ。私、努力家なのよ。いい思いをさせてあげるわ」
旅の途中に何度も商売女と夜を過ごしたから、押し掛けでなければこの話に抵抗はなかった。彼は肩をすくめると、彼女に盃を差し出した。ワインが注がれ、自分の盃にも勝手に注いだ娘と一緒に乾杯をした。
マリエラは五つ先の村の出身だと言った。ごく普通の農村で生まれたが、飢饉の時に村に食べるものがなくなり街に働きにいくように家族に言われたと話した。
「働くと言っても、つてもなにもない私は奉公にも出られない。兄さんたちのように職人の見習いにもなれない。女給つまりこの仕事をするしかなかったってわけ」
「もっと別の仕事がしいたんじゃないのか。たとえば、他の街に行けば、少なくともただの女給としての仕事があるんじゃないのか」
マリエラは首を振った。
「おおっぴらにやるか、こっそりやるかの違いだけよ。あのね。私たち女給にはこれといった賃金がないの。旅籠の持ち主と結婚するのではなければ、こうやって生活費を稼ぐほかはないのよ。私はそんなに嫌じゃないわ。だって、少なくとも自分がどうしても嫌な客とはしな

くてもいいんですもの」
なるほど。では、少なくともこの娘の一晩の客としては合格したってわけだ。話がつくと、マリエラは安心して立ち、厨房からマックスと自分の料理を運んできた。他の客たちの料理は少し遅れて旅籠の女将と親爺が運んできたが、明らかにマックスたちのほうが量も多く、肉も大きい部位が選ばれていた。
水っぽいスープにはいろいろな野菜がくたくたに煮こまれていた。肉もあまり若くはない雌牛をつぶしたためか非常に長い時間をかけ煮込んで柔らかくしてあった。腹を膨らませるために穀物の粉を臼で挽いて作った粥がでる。それからざらざらしたパンだ。
グランドロン王家が全幅の信頼を寄せる賢者ディミトリオスのもとで育ったマックスは、旅に出るまでこのような食事をした事はなかった。ディミトリオスの家では主人の他に何人もの弟子たちがテーブルクロスのかかった長いテーブルに行儀よく座り、きれいに用意された食器に召使いたちが順にスープを注いでいった。同じスープでも丁寧に裏ごしした人参が色鮮やかで滑らかなポタージュや、青エンドウがきれいに浮かぶコンソメなどだった。肉も子牛のステーキや、丁寧に作られた腸詰めなど決して安くなく手間のかかったおいしい料理が出た。彼がディミトリオスの屋敷に引き取られた時は弟子としてではなくただの使用人としてだったのだが、それでもこの旅籠で出る料理よりはいい物を食べていた。
ディミトリオスに引き取られた当初は、家に帰り両親や兄弟たちと暮らしたいと思った。主人は厳しく仕事も楽ではなかったから。けれど、次第に提供される生活のレベルに慣れてしまい、常に空腹に悩まされる鍛冶屋の次男の生活には戻りたくないと思うようになった。貧富の差は大きかった。社会の壁も厚かった。偶然老師の家に引き取られ、しかも、下僕から弟子と身分が変わったことも幸運だった。わずかな知識は剣や生まれには打ち勝てない。だが、ディミトリオスほどの賢者と彼にあらゆる知識を習った弟子たちの持つ学問は、それだけで先祖伝来の財宝や何万もの軍馬を連れた戦隊よりも価値があった。王家に出入りし一定期間学問と礼儀作法を子女に教えると、その倍以上の時間を自由氣ままに旅をするに十分な報酬を手にする事ができた。それは鍛冶屋の父が一生かかっても目にする事のできなかったであろう大金だった。
マリエラにとっては客の相伴で食べる、他の人たちよりはほんの少し大きい肉が最大の贅沢だった。彼女がそうすることでしか食べていく事ができないと言うならば、彼の実はとても重い財布からほんの少しの金を使うことにはためらいはなかった。
マックスは、夜が更ける前にマリエラを連れて部屋に向かった。部屋は質素で寝台は狭く、この女の寝相が悪かったら自分は床の上で朝を迎えるのだろうと思った。上着を取り靴紐を解いてそれから一つしかない椅子に座った。マリエラはどっかりと寝台に腰掛けていたので。彼女は窓によりかかり遠くに見える山の方を眺めていた。
「君の故郷かい？」
その問いに、彼女は黙って頷いた。
「時おり帰って、家族に会う事もあるのかい？」
彼が重ねて問いかけると、マリエラははっとしたように彼の方を振り

返った。それから視線を落として首を振った。
「私は死んでいるのよ」
　意味を図りかねた。それを察してマリエラは少し笑った。
「私は自由人じゃないの。あの家から出るには、花嫁行列か葬列しかないの。でも、初夜権を誰も買ってくれなかったから……」
農村の多くの民はそうだった。移動の自由はなく、職業を変えるのも土地を出て行くのも領主の許可がいた。領地に属する娘と初夜を過ごす権利も領主にあった。もちろんすべての結婚する村娘と本当に寝るほど酔狂な領主は多くなく、たいていは花婿がこの権利を買い取る一種の結婚税であった。だが口減らしをするような貧しい農村では嫁を迎え初夜権の支払いをしてくれるような青年はなかなか見つからなかった。だからマリエラは領主にとって死んだ事にしてしまわねばならず、二度と故郷に帰る事はできないのだった。
　彼は今宵はこの娘にできるだけ優しくしてやろうと思った。

狩り

　シャーッという音がして、何か大きいものが横を通り過ぎた。
「きゃっ」
アニーは頭を抱えて座り込んだ。里下がりから戻り、一刻も早くラウラのもとに戻ろうとしていた所だった。
　元服を迎える少年が手を広げたくらいの翼を広げて颯爽と飛び過ぎたのは王の鷹だった。顔を上げると、数間先に鷹匠が立っていた。獰猛で氣性の激しい鷹を自由に操る鷹匠は冷酷で氣位が高く、取っ付きにくい男であった。目つきが鋭くにこりともしない。ましてや侍女とは言え、もう少しで怪我をさせそうになった女に対して謝罪をしようとは全く考えていないようであった。
　鷹匠は高位ではない。「青い血の流れている」つまり貴族の生まれのものはほとんどいない。けれど、鷹は狩りの楽しみの半分以上を占めていたので、鷹の持ち主にはできない訓練をする鷹匠は必要不可欠な存在であった。
　たいていの人間の人生や待遇は、生まれとともに決定する。貴族として生まれれば、毎日召使いに傅かれ毎日のパンの事を心配する必要はない。土地に縛られた農民として生まれた者は、どれほどの努力や忍耐をもって朝から晩まで働いても肉の入ったスープを毎日口に入れる事など望む事すら許されない。
　だが、特別な職業があった。僧侶、教師、薬剤師、写本師のように、王侯貴族でも手にできない知識を持ち、それを極めたものはその出自を問われなかった。同様に優秀な鷹匠ともなると個人的な性格がどうであれ、たとえ王に対する態度が横柄でも問題はなかった。いま目の前に

立っているのは、この城でももっとも無愛想な、つまりもっとも高い報酬で迎えられた男ブゼだった。
彼は肘までである革の分厚い手袋の上に鷹を停まらせるとアニーの方を見た。雌鷹の厳しい黄金の瞳とブゼの冷酷な瞳に見つめられてアニーはぞっとした。鼠や小さな鳥たちのようなひどい目に遭わぬうちに、頭を下げてさっさと逃げだした。
城の中庭には「鷹の館」と呼ばれている建物がある。ここには、ブゼを始めとする鷹匠とその見習いたち以外の立ち入りは禁じられている。暗い部屋には猛禽たちの種類に合わせてたくさんの止まり木が、小さな森のように設置されていた。砂利が敷き詰めてあり、その高い天井の建物の中を猛禽たちは自由に飛び回る事ができた。鳥らはここで寝泊まりし、保護されていた。優秀な鷹やハヤブサはその卵の大きさの宝石よりも価値があると考えられていたからだ。
鷹たちほどの価値は認められていなかったが狩猟犬も、丁重な扱いを受けて飼われていた。鹿狩りや猪狩りは王侯貴族たちの大切な楽しみで、鹿や猪の習性を知り尽くした猟師たちも重宝されていた。鷹匠と違って彼らは城には住まず、大切な犬たちとともに《シルヴァ》の森にある王侯貴族たちの豪華な狩猟用別荘の近くに住んでいた。このように狩りのためには多くの専門家と動物が関わっていて、年間を通して大層な手間と金品が費やされていた。
アニーは、国王の狩猟用別荘の一つのあるヴァレーズ地域の出身であった。両親とも健在だが鼠のように貧しく、父親は長男のマウロと長女のアニーのことを妹に頼んだ。妹は裕福な寡婦で、その亡くなった夫は王家直属の森林管理官として財を成した。その縁で兄妹は王城での召使いとして雇われ、里下がりのときもこの叔母の所に滞在するのが常だった。アニーは叔母にはラウラが用意してくれた手当金で買った王都でしか手に入らないレース編みや装飾品を贈り、そしてわずかな時間を見つけては実家へも足を運んでは幼い妹や弟にやはりラウラが持たせてくれた菓子や果物を持っていってやった。その道すがら王家の狩猟用別荘の横を通る。王城とは較べ物にはならないとは言え、この地域では他にはない豪華で立派な屋敷で、子供の頃その中に入る事を夢みていた事を思い出した。
この大きな別荘の隣には森林管理役場が建っている。森番の長としてフランソワ・ド・ジュールという名の下級貴族が任命されていて、国王の森林保護の名のもとに大きな権威を振りかざして領民たちに毛嫌いされていた。《シルヴァ》で行われる狩りとは国王の持ち物である鹿や猪をゲームとして捕まえる行為でありその獲物を他の人間が横取りするのは犯罪であった。けれど、近隣に住む人びとにとっては森に入り薪や家の修理に使う木材を手に入れ、食べられる植物や動物を得るのは死活問題だった。農村では天候によって収穫に大きな差が出た。飢饉の年は年貢を納めると自分たちが食べるものもほとんど残らぬこともあり、人びとは森の豊かな恵みに頼る他はない事もあった。
森は深く、秘密に満ちている。その奥には、大小異なる多くの生きものの他、まだ人の子が見た事もないような大きな鹿や、荒ぶる猪、大人が五人で囲んでも手が届かない大木、そして、たくさんの食べられる木の実などがあるといわれている。だが、人びとが関わる事ので

きるのはほんの周辺部分だけで、その奥深くへ進めば、道を失いもう戻ってくる事ができないと畏れられていた。狼や熊に襲われる危険を冒してようやくわずかな森の恵みを手にして帰ってくると、それを横取りしようとする不届きものもいた。

かくして森の盗賊が横行し、森番は取り締まりを強化した。不幸にも捕まって罰せられた領民たちに対する監督責任として大量の罰金を課される貴族がいる一方で、密猟を組織的にしているのにジュールに袖の下をつかませる事で検挙を避けている集団もあった。その不公平とあからさまな蓄財ぶりに、ヴァレーズ地方ではジュールを快く思う者はなかった。

だが、アニーが城に来て驚いた事に、ルーヴの宮廷ではジュールを悪くいう者はほとんどいなかった。ジュールは別荘に現れた王侯貴族に実にそつなく対応したし、王は鹿や猪を追う楽しみと素晴らしい狩猟料理にしか興味がなかったからだ。彼女はその事にひどく落胆したが、一度だけ「おや」と思う事があった。

その日、ラウラは森林管理に関わる審理に同席するために広間にきていた。本来はもちろん世襲王女であるマリア＝フェリシアが同席すべき所なのだが、新しい絹織物を持ってきた商人と会う時間を割かれるのは惜しいと思った姫は、彼女だけを広間へと送ったのだ。アニーはその供をしていた。登城していたジュールが恭しく美辞麗句を述べて森林管理が何の支障もなく行われていると報告するのを、うつむきながら苦々しく思っていたのだった。ラウラは、わかっていますというようにアニーの方に目配せをしてくれた。それだけで彼女の氣持は少しは慰められたのだが、午餐をとるため王や廷臣たちがジュールとともに食堂に去ったあと一人残った《氷の宰相》ザッカが小さな声で「狐め」とつぶやいたのを耳にしたのだった。

アニーは、ラウラも意外そうに宰相を眺めているのを見た。

水車小屋と不実な粉ひきの妻

失敗したなと思った。宿を探すのが遅すぎた。当てにしていた宿屋がいっぱいだと断られたので、他の旅籠がないかと馬を進めた。だが、どうやら町から遠ざかってしまったようだ。農村で日がとっぷり暮れてしまったので、農家にでも泊めてもらおうかと思ったが、断られてしまった。一軒で上手くいかないと、隣でも上手くいかなくなる。他の奴らが断ったのは何か理由があるからだと思い、人びとの警戒心が強くなる。

川の水音と、水車の音が聞こえてきた。ああ、ここなら村の住民と違う反応をしてくれるかもしれない、そう思った。水車小屋に住む粉ひきは、村の農民たちから距離を置かれるのが普通だったからだ。

「誠実な粉ひきはいない」「粉ひきは悪魔の友達」と散々ないわれようをしている原因が、領主の都合による水車小屋利用強制であることをマックスは理解していた。人びとの暮らしの中心にはパンがあり、小麦粉があった。農民は年間を通して汗水たらして働き小麦を自ら育てた。それを自らの挽き臼で粉にすれば手間はかかっても金はかからないのに、挽き臼の使用を禁止され水車小屋で使用料を払って挽くように決められていた。年貢の他にこうして搾り取られることを農民たちは快く思っていなかった。だが、その怒りの矛先は見た事もない領主さまではなく、水車小屋を借りて中間手数料でがっぽり儲ける粉ひきに向けられるのだった。

どうしても関わらざるを得ないけれど憎悪のある関係がどの農村でも見られたので、もめ事に巻き込まれたくないマックスは出来るだけ水車小屋には近寄らないようにしていた。農民たちの肩をもつわけではないが、感じが良くて親切そうな粉ひきにはこれまでに出会ったことがなかったのだ。だが、今晩は背に腹は変えられない。彼は明かりと水音、水車の動く木のきしむ音を頼りに馬を進めた。

「水車小屋に泊めてもらおうなんて、あんた、よっぽどの世間知らずなの？」

出てきた女房は皮肉っぽく言った。若くこぎれいな女だった。町で流行っているデコルテがかなり開いた上衣を着て、しゃれた上履きも履いていた。

「そうとも思えないが、でも、水車小屋に一晩の宿を頼むのはこれがはじめてだ。嫌なら断ってくれればよそをあたるよ」

その返事に興味は全くなさそうだったが、値踏みするように着ているもの、馬などをじろりと見た。

「旅籠より安く泊れるなんて思わないでおくれ。もっとも大した料理は出せないけれどね」

「今夜休めれば、それでいい。助かるよ」

「亭主は、領主さまの所に出かけていて不在なんだ。今夜遅くか、明日の朝には戻ると思うけれどね」

脳裏に「不実で美しい粉ひきの妻」というお決まりの文句が浮かんだが、何もそこまで地をで行くこともないだろうと思い返した。女は彼を水車に近い階段を上がった半二階の小部屋に案内して、荷物を置いたら食事に降りてくるように言った。

マックスは小部屋を見回した。こざっぱりとした木の床と壁の部屋

で、小さな寝台と物を置けるようになっている台、それに小さい椅子が一つあった。窓からは星が覗けて、水と軋む車輪の音が常にしていた。

食事に降りて行くと、女はスープとパン、それにいくらかの干し肉やチーズを並べ、木の盃にワインを入れて出した。同じものを食べるのに、自分は水を飲んでいた。

「僕だけワインを出してくれなくてもいいのに」

女は笑って言った。

「金を取るだけとって、ワインも出てこなかったと言いふらされると困るからね。私たちは何も悪い事をしないのに粉屋だというだけで人びとは悪口を言うんだ。これ以上悪く言われるのはごめんさ」

彼は盃を口に運び、少し口に含んでから、盃の中を見た。ワインらしくない風味を感じたのだ。女がじっとその様子を見ていた。何も悪い事をしていないのに、か。そう思いながら、そのまま飲み込んだ。

マックスが寝台に横たわってから、小一時間が経った。月の光に青白く照らされた女の腕がゆっくりと伸びた。彼の衣類をそっと触り、目をつけていたものを探していたがそこにはなかったのでもう少し側に寄ると肌掛けをそっとずらし、淡い月の光にきらりと光る黄金の十字架につと触れた。

それと同時に、それまで動かなかった彼の右手がはっしとその女の手首をつかんだ。

「まさか！　動けるのか」

粉挽きの妻は思わず叫んだ。彼は寝台から起き上がった。

「毒入りのワインをありがとう」

「飲まなかったのか」

「飲んだよ。ヒヨスだったね。残念ながら、僕にはこの程度の量では効かないのだ」

女は、唇を噛んで小さな椅子に座り込んだ。

「どうするつもりだったんだ。毎回、泊った客に毒を飲ませて、命を取っても、死体の処理に困るだろうに」

「殺しはしないさ。でも、目が覚めても数日間は頭がはっきりしないから、たぶんここで盗られたと思っても、騒ぐ事は出来ない。いつもうまくいったんだ。毒の効かないヤツがいるとはね。あれを飲んでもなんともないなんて、あんたは何者だい、悪魔に魂でも売ったのか」

「悪魔に魂を売ったのはそっちだろう。君は、何も悪い事をしないのに粉屋だというだけで人びとが悪口を言うと言っていたね。なのに、なぜ……」

「皆がいつも騙すと蔑むと、いつの間にか本当にそういう人間になってしまうんだよ。どんなに真面目にやって、仲良くしたくても全然受け入れてもらえない。そのうちに、だったらやってやると思うようになっちまうんだよ。うちの人だってそうだ。村の奴らや、あんたみたいにいつも敬意を持たれているヤツにはわからない」

彼は首を振った。

「いつも敬意なんてもたれたりしていないさ。そうだったら毒の効かない体になんかなるわけないだろう」

女は薄氣味悪そうに見た。

「あたしをどうするつもりだい」

「どうもしないさ。遅く帰って来た旦那に誤解されないように、さっさと自分の寝床に帰ってくれ。それに、明日発つまで二度と僕を襲わないでくれればそれでいい」
「なぜ……」
「僕は一夜の宿が欲しかったんだ。それ以上の大騒ぎはごめんだし、足止めもされたくない。ただ、忠告しておくよ。こんな事を続けると、そのうち必ず痛い目に遭う。今回の事が天からの忠告だと思って、足を洗うといい」
女は何も言わずに部屋を出て行った。彼はしばらくうとうとしたが、再び物音で目が覚めた。どうやら亭主が帰って来たらしい。女とひそひそ話をしているのが聞こえた。マックスをどうするか二人で話しているらしかったが、やがて、余計な事をしない方が身のためだと結論づけたのか、二人は寝室に消えて静かになった。マックスは、ようやく安堵して眠りに落ちた。

朝になって、マックスは奇妙なくらい愛想よくする亭主に何事もなかったかのように対応した。歓待に礼をいい、旅籠に泊まる時の相場を渡して水車小屋を後にした。
あの二人は悔い改めたりはしないだろう。彼は思った。ヒヨスは歯の痛みをとるためにも使われているし、持っている事を問われる毒物ではない。量を間違えれば死にいたるが、経験豊かなあの二人はそんなヘマはしないつもりだろう。
皆がいつも騙すと蔑むと本当にそういう人間になってしまう。あの時の女の言葉は彼の怒りを鎮めた。粉ひき夫婦が誠実なはずはないとマックスですらどこか思っていた。その偏見が彼らをやはり不実な粉ひきにしてしまう。彼らのやっている事が罪であるのは間違いない。だが、それを裁くのは一介の旅人である自分でなくてもいいはずだ。僕は裁判官でもなければ、神の奇跡でもない。毒が効かない男でしかない。

「またか。かわいそうに」
兄弟子たちのひそひそ声が甦る。暗い召し使い部屋で何度めかの苦しみに悶えた後だった。マックスを苦しめているものが、ディミトリオスに定期的に飲まされる様々な薬のせいだという事は、屋敷中の誰もが知っていた。時には激しい嘔吐、時には腸がねじれるような痛み、またある時は体中におぞましい湿疹が出た。割れるような頭痛や呼吸が出来なくなる事もあった。
「なぜあの子にあんなことを？」
「王太子さまのためだよ」
ひそひそ声は続いた。少年が眠っているのだと思って。
「王太子さまに毒耐性をつけるために、老師は少しずつ毒を飲ませていらっしゃるのだ。だが、大人と違ってどのくらいの量を飲ませていいか確かでないものだから、マックスで実験をしているのだ。彼は王太子さまより小さいし、あの子が耐えられた半分の量なら安全だっていうんでな」
「なっ……。じゃあ、必要もないのにマックスみたいな子供を雇ったのは……」
「そうだよ。このためだ」

高熱が引いてきた後のだるくて力の入らない体をそっと動かすと、彼は兄弟子たちに泣いている事を悟られないように壁の方を向いた。《黄金の貴婦人》とマックスが呼んでいた、あの美しい女性にお茶を運ぶ度に、お菓子をもらうのを見過ごしてくれた主人。もしかしたら、自分を氣に入ってくれているのではないかと思っていた。けれど、自分の存在意義はそんな事だったのかと悲しくなった。両親がこの事を知っていたのかどうかはわからなかったが、もはや逃げだして帰る事も出来ないのはわかっていた。

耐えられたのは、やはり《黄金の貴婦人》の存在があったからだった。ある夜、激しい下痢の後でぐったりして、ようやく痛みが治まってうつらうつらとしていた時、屋根裏の小さな部屋に主人に案内されて、かの貴婦人がやって来たことがあった。マックスは驚いてディミトリオスを見た。

「いつもお茶を運んでくれるあの少年はどうしたとおっしゃるので、病に臥せっていると申し上げたらどうしてもお見舞いにとおっしゃるのだ」

主人は苦虫を噛み潰したような顔をしてこっそりと言った。

「奥方さま、他の使用人の手前というものもありましてな」

「それが何だというのでしょう。こんなに小さいのに、けなげに働いているんですもの。まあ、弱ってかわいそうに」

その優しい声と、心から心配してくれている美しい顔を見て、彼の遣り切れない心持ちはすっとほどけていった。

「大丈夫です。もう、治ってきましたから」

マックスがそう言うと、《黄金の貴婦人》はしばらく片手で彼の頬を、もう片方の手でその弱々しく差し出した手を優しくしっかりと握りしめていたが、やがて自分の首から十字架を外すと少年の首にかけた。

「あなたを神様が守ってくださいますように」

マックスは、この女性はなぜ自分がこのような目に遭っているのかを知っているのだと思った。ディミトリオスの様子や、一目で分かる高貴さから、この方はもしかすると王太子の縁者なのかもしれないと思った。王太子のために自分がこのような苦しみを受ける事を知っていて、それでいつも格別に優しくしてくれるのかもしれないと。そうだとしたら、このひどい役目に選ばれた事も悪い事ばかりではないのだと思った。

馬を進めながら、マックスは子供時代の想い出に浸っていた。《黄金の貴婦人》のくれた十字架の効果かどうかはわからないが、彼は無事に生き延びた。老師に飲まされる毒にも次第に体が慣れて、かなり強いものを飲まされても何ともなくなってきた。

マンドレイク、ウェラトゥルム、絹の道のナッツ（ストリキヌス）、ドゥルカマラ、オピウム、ヒヨス、ヘレボルス（クリスマスローズ）、つる草の毒野瓜（コロキンテ）、毒ニンジン（コニウム）、去痰に使われるブリオニア、ベラドンナ、ハエ殺しのキノコ（アガリクス）、毒矢草（トリカブト）、踊蜘蛛（タレンテュラ）、クロタロス（ガラガラヘビ）、蜂、南の玉虫（カンタリス）。どれを使ってももはや彼を簡単に殺す事は出来ない。本来は現在の国王であるレオポルド二世を毒殺から守るための老師の策が、マックスを粉ひき夫婦の奸計から救った。皮肉な事だなと彼は笑った。

あの女はよりにもよってこの十字架を盗ろうとしたのだ。彼は黄金

の十字架に手をやった。《黄金の貴婦人》の優しい手の感触が甦る。あなたがいつも私を守ってくださるのですよね。彼は馬を進めて行った。

氷の宰相

「あの、ラウラさま……」
マリア＝フェリシア姫付きの召使いエレインが呼びかけた。ラウラはその戸惑った様子にすぐに氣がついた。
「どうしました？」
「その、宰相さまが、姫さまとラウラさまにお会いしたいと、おっしゃって使いをよこされたのですが……」
「姫が、なんとおっしゃったの？」
「その……。『氷は鍾乳洞にでもこもっていればいい、坊主に興味はない』と」
周りの召使いたちが思わず笑い声をもらしたが、ラウラがにこりともしなかったので慌てて咳払いをしてごまかした。
彼女はため息をついて、立ち上がった。
「わかりました。宰相殿はどちらに？」
「孔雀の間でお待ちです」
　彼女は左腕に覆い布を被せると、宰相に会うために出て行った。
「ねえ。宰相さまが姫さまに何の御用があるんだと思う？」
アニーは親友であるエレインに問いかけた。エレインは首を傾げて答えた。
「わからないわ。でも、ここのところ、多いのよね。ヴァンクール様は一度だって姫様に会おうとなさらなかったのに」
アニーは口には出さなかったが、あの姫様に会ったって、国政の事なんかまるで関心がないのにと思っていた。さらに、亡くなられた前宰

相ヴァンクールさまとは、ずいぶん違うやり方をなさるおつもりらしい、そう思った。

「お待たせいたしまして、申し訳ございません」

ラウラは、孔雀の間に入ると、窓から外を見ている黒衣の男に声を掛けた。男はゆっくりと振り向いた。

「これは、バギュ・グリ殿。つまり、姫はお見えにならないんですね」

「お見えになりません」

彼女は理由を言わなかった。嘘をついても、この鋭い男には通じない。

「構わないのですよ。どちらにしても、姫とはあなたとするようなディスカッションは期待できません。かといって、声をおかけしないわけにもいきませんからね」

彼女は顔色一つ変えずに口を開いた。

「姫や私とお話をなさる事が、どうして必要なんですか」

「姫は将来この国の女王となられる方です。ふさわしい判断力を持っていただく必要があります。それが出来ないのであれば、補佐をする方に正しい判断力を持っていただかねばなりません」

「私は姫が女王になる時に、ここにいるとは思いませんわ」

「なぜです？」

「あと一年で姫が二十歳になられると、私の役目は終わるからです。姫がその後も私を必要とされるとは思いません」

ラウラはマリア＝フェリシア姫が鞭打つ楽しみを失ったあとも自分に側にいてほしいと思うほど好かれていない事をはっきりと自覚していた。そしてそれは残念な事ではなかった。現在のような暮らしはもう二度と出来ないだろうが、良家の子女の家庭教師や女官としての仕事ならいくらでも見つかるに違いない。少なくとも自分の力だけで生きていけるだけの教育を授かった事をありがたく思っていた。

「姫があなたになんとおっしゃったかはわかりませんが、少なくとも国王陛下はあなた以上の補佐の出来る女性を簡単に見つける事が出来るとは思っておられませんよ」

「補佐の女など必要ないではありませんか。たとえ、姫がすぐに戴冠せねばならない事になっても、あなた方、廷臣の皆様が実際の政治をなさるのでしょう」

ラウラは言葉を選びながら、真剣に答えた。

本当に女にしておくのは惜しい。《氷の宰相》は感心した。

先日、国庫の財政状況の改善について、姫の意見を伺った時にも、姫と他の女官たちが馬鹿にしたような顔で興味のなさを露呈したのに、ラウラだけは建設的で意味のある意見を口にした。もちろんザッカにしてみれば、理想に走りすぎた優しい意見に過ぎなかったのだが、少なくとも彼女は国庫にとって重要な意味を持つ通行税や関税の減少について知っていたし、タタム峠に至る《シルヴァ》を横切る道の整備でグランドロンに流れた商人たちを呼び戻せる可能性に言及した。他の女官たちは、タタム峠がどこにあるかもわかっていなかったのだ。女たちは衣装と遊びにしか興味がない愚かな存在だと、ザッカは思ってきた。そのくせに、自分の利に関する事に関しては、後先を考えずに政治に口を出そうとする、厄介な存在だと。女には冷静に物事を判断する能力が欠けている。だが、この娘だけは別だった。大臣にも匹敵する知識と能力があるにもかかわらず、女である故に政治に関わる

事はないと冷静に自分の立場をわきまえている。意見ははっきりというが、それを受け入れてもらえる余地があるとは思っていない。その冷静さを知って以来、ザッカは彼女に一目置くようになっていた。
「姫には、あなたが必要ですとも」
ザッカは不敵な笑みをもらした。彼女にはその意味が分からなかったが、問いただしたいとも思わなかった。
「私をお呼びになったのは、その話をなさりたいからではありませんのでしょう？」
「違います。今日は、聖カタリナ修道会の閉鎖について、姫とあなたのご意見について伺うつもりで参ったのですが……」
彼女が黙って宰相の次の言葉を待っていると、彼は考え込むような顔をして言葉を切った後、不意に言った。
「憶えていらっしゃいますか、前回、お話をした時に、水路の迂回の話をした事を」
「ええ、もちろんですわ。もうじき工事が始まるとおっしゃった事も」
ザッカはゆっくりと頷いた。
「そう。私はこれから非公式視察に行くつもりなのです。姫がおいでにならないなら好都合です。一緒に行きませんか」
ラウラは息を飲んだ。それから頷いた。
「ぜひ行きとうございます。でも……」
「でも、何ですか？」
「私も同行して人に知られずに視察が出来るのでしょうか」
ザッカは彼女の品はいいが贅沢な金刺繍のされたドレスを上から下までじろりと見て言った。
「その服装では無理ですな。目立たぬものを用意いたしましょう。二刻後に鐘楼に至る階段のところに一人でお越し下さい。くれぐれも他のものに見られぬように」
ラウラは黙って頷いた。

彼女が鐘楼の階段に着くと、ザッカはもう来ていた。彼は托鉢用の茶色い粗末な僧衣を着てフードを被っていた。彼の聖職者姿を見るのははじめてだった。いつもの冷たく残忍にすら思える彼の顔が、この服装をすると厳格で敬虔な神父に見えるのが不思議だった。ラウラの姿を目に留めると、彼は階段の間近の床の文様を足で踏みながら不自然に手を伸ばして、少し遠くの壁を押した。今までただの壁だと思っていたところが、わずかな隙間をみせ、それは扉である事がわかった。
「ここを踏みながらでないと、開かない造りになっているのですよ」
その言葉に、ラウラは息を飲んで頷いた。
ザッカは彼女に牛脂灯を渡して言った。
「服を用意してあります。中で着替えて下さい。着替え終わったら、ノックをして下さい。私も入りますから」
ラウラは黙って頷いて、その扉から秘密の部屋に入った。牛脂灯の光では遠くまで見えなかったが、下へ向かう狭い階段があるのがわかった。閉まったドアの内側に、確かにドレスがかかっていた。ドレスもフード付きの外套も全て非常にくらい色で、暗闇の中では真っ黒に見えた。彼女はドレスを脱いで、その暗く荒い生地の服に着替えた。その服はラウラにはわずかに大きかったが着て不自然に感じるほどではなかった。彼女は手早く外套も身に着けると、扉をノックした。

静かに扉が開き、僧衣の男は黙って入ってきた。そして、何も言わずに扉を閉めると階段を降りていった。
これほど深い階段が、こんなところにあったとは！　十二年もこの城の中に住んでいたというのに、ラウラは知らなかった。これは、いざという時に秘密裡に城から出入りするための、この城の最高機密に違いなかった。階段を降りきると、石畳の暗い道が続いていた。そのトンネルの上部に時おり窓が見えた。といっても、それはほんのわずか穴が開いているに過ぎなかった。そこを通して、外界の音が漏れてくる。完全な静寂から、動物や鳥の鳴き声、樹々の間をわたる風の音、水音。緩やかな下りとなった後、またしばらく完全な静寂に戻ったのは、内側の城壁の下を通っているに違いない。ほどなくして、窓の光が再び見えてきた。聞こえてくるのは騒がしい街の様相だった。人々の行き交う様子、行商の声、家畜の鳴き声、扉を開けたり荷車を動かす忙しい日常の物音だ。子供の頃には彼女自身も馴染んでいた城下の風景だった。
やがてトンネルはずっと狭くなり、行き止まりになった。ザッカはゆっくりと正面にある石を右側にずらした。そこに小さな取手があるのが見えた。彼が手前に引くと、壁は低い音を立てて横にスライドした。急に明るくなったので、ラウラは目をしばたいた。目が慣れてくると、向こう側は小さな民家の狭い部屋である事がわかった。宰相の目に促されて彼女はその扉から向こう側へ出た。牛脂灯を吹き消してザッカは彼女に続き、ゆっくりと扉を閉めた。部屋の側から見ると、その扉は飾り棚で覆われていて、傍目にはそれとはわからなかった。
「驚きましたか」
ザッカは口先だけをゆがめて笑った。ラウラは頷いた。
「この通路は古いものなのですか」
「ええ。城の建築当初からあったのですよ。この通路の存在を知っているものは、ほんのわずかです。国王陛下や王太女殿下も知りません。特に、あの姫に報せたりしたら、どんなに愚かな理由で使われるかわかったものではありませんからね。いざという時のために極秘にしておかねばならないのです」
これはザッカからの口止めだった。それと同時に、宰相がマリア＝フェリシア姫に対してどのような意見を持っているかの表明でもあり、大して尊敬も持っていない事をも示していた。ラウラは簡潔に答えた。
「わかりました」

村、農耕とフェーデ

「申し訳ない、訊きたい事があるんだが」
ヴァレーズ地方に入り、しばらく馬を歩かせていたマックスは、村の外れにある畑で農民らしき男に声を掛けた。振り向いた男に対し、縁なし帽を少し持ち上げて黙礼をした。この縁なし帽はには白い羽が飾ってあるが、宮廷に出入りする時にかぶるきちんとしたものではなく、酔狂な自由民に思える程度の質素なものを使っていた。
　それでも、マックスの服装は男の身なりと比較してかなりよかった。宮廷や上流階級で教師としての仕事をする時、それからこうして一市民として人びとの間を歩いていく時、彼は常に自分を全く別の存在に感じた。時に彼は得体の知れない異国人であり、時にははるかに裕福なよそ者であり、時にはとるに足らない下層階級者だった。
　ディミトリオスからは、いくつもの言葉、古今東西の古典、哲学者や為政者の考え方、地理や文化、数学や薬学など多くの知識を体系的に学んだ。それは本来ならばマックスのように若い青年が到底身につけられないほどの量で、ディミトリオスの体系だてたメソッドによってのみ可能な教育だった。けれど、老師のもとを離れて、この二年間に彼が旅と仕事で見聞きしたすべては、全く体系的ではなくまとまった意味をなしていないにも拘らず、彼の考え方と知識に深い影響を与えた。
　僧と為政者は、全く違う考え方をした。彼らには全く違う種類の善悪や正義があった。手工業の職人と商人も全く違う考え方をした。彼らの誇りと怒りは全く違うものに向けられていた。そして町の人間と村の人びとも違っていた。
　この二年間の幾度かの失敗から、彼は村を通る時にはどのような態度と服装をすべきかを知っていた。

「なんだね」
深い緑色の短い上着を着てつばのある帽子を目深に被った農夫は、あまり歓迎しているとは思えない様相で大儀そうに言った。
「ルーヴに向かっているんだが。この近くで夕暮れまでに宿屋のある町に辿りつけないかね」
「その馬を走らせりゃね」
　マックスは肩をすくめた。
「馬が朝から脚を引きずっているんだ。まずは蹄鉄屋に行かないといけないようだ」
男は顎で村の方を示した。
「蹄鉄屋なら隣の村にいるが、あいつは飲んでいてね。今日はもう行っても無駄だよ。この村にも隣の村にも旅籠はないがね」
「だったら、この村でわずかな金と引き換えならよそ者を泊めてもいいという家を教えてくれないかね」
「どのくらいだね」
男がちらりと興味を持ったように見えたので、彼はあまり高くない旅籠で払った金額の三分の二の価格を口にした。すると男は口をへの字に曲げてから言った。
「馬に飼い葉をやらなくてはならないんだろう。それは別でいいのかね」

マックスは、少し考える振りをした。何もなければ、出る時には旅籠で払ったのよりも少し多い額を置いていくつもりだった。

　このような無愛想な男にどうしてこんな嫁が来たのかと驚く、快活な女房は彼を見ても大して驚かなかった。どうやら、村のはずれに住んでいるこの男は、これまでにも何人もの旅人に宿屋代わりに寝床を提供してきたのだろう。

　藁葺きの家は狭くて暗いだけでなく、床板が張っていなくて粘土で固めてあるだけのようだった。板張りの壁の隙間には苔が詰めてあるだけで、扉にも蝶番はなく革で止めてあった。春先とは言え、夜はこれでは相当寒いに違いないと、彼は思った。

「すみませんねえ。こんなものしかなくて」

女房は、蕪と青菜を脂身で煮たスープを木のボールに注いで言った。他には固そうなパンしかなかったから、今夜の食事はこれだけなのだろう。貧しいとは思っていたが、このあたりの暮らしは相当厳しいらしい。彼は黙って感謝を捧げて木製の匙でその薄いスープを掬った。

「去年はもっとましな生活を送れたんだが」

ジャコと名乗った農夫は、口ごもるように言った。

「去年は、センヴリもグランドロンもどちらかというと豊作だったようですが」

マックスは首を傾げていった。ルーヴランに入ってからアールヴァイルを通ってきた時も、さほど景氣が悪いようには見えなかった。

　ジャコはため息をついた。

「フェーデがあったんでね」

　マックスは眉をひそめた。フェーデ（私闘）とは、ある者が別の者に権利を侵害され繰り返し抗議を申し立てても加害者が誠意を示さない時に、相手を協議の席につかせる被害者による一種の実力行使を意味する。具体的には私闘宣言をした後に相手の支配下にある土地を襲って略奪や放火などを行うのである。

　この権利は、もちろん誰にでも認められていたわけではない。貴族身分や、武器の携帯を許された「名誉ある」自由民だけの特権であった。

「この村の領主はどなたなのですか」

「ジュールさまさ。陛下の森番の長として、狩り用の別荘と森林管理をしていてね。この地方ではもっとも羽振りのいいお方なんだ。だが、上の方に見せる顔と、下に向ける顔があまりに違うお方でね。森番たちやお抱えの騎士さまたちは一つや二つではない恨みを抱いているのだ」

「フェーデのためにこの村が襲われたのはこれが始めてじゃないんですよ」

女房もため息をついた。

「今回はジュールさまが、とある騎士の妹にひどい事をしてね。その誠意のない態度は、騎士殿にとっては腹に据えかねる事だったろうよ。部下にフェーデを起こされるなんて、しょうもない話になったのさ。だが、襲われて一年間分の働きに火をかけられる我々の身にもなっていただきたい。こんな目に遭っても、年貢の方はさっ引かれる事もなく持っていかれるんだ」

　マックスは、惨い運命を心から憎く思った。貧しい暮らしの中で働き続ける事でしか生存できない人びとに何の罪があるというのだろ

う。

自由民（粉屋、大工、靴屋、革なめし工、織物工など）と違い、農業や牧畜に従事する小作たちはその土地に縛り付けられていた。自分の意志で他の領主に仕える事も許されず、生まれた時にその運命が決まる彼らは、名前こそ違えども奴隷と大して違わなかった。街に行って面白いことを探したり、隣の荘園の小作の娘と結婚したりする事はできなかった。不作やこの村でおこったような不幸でも、容赦なく年貢は取り立てられた。だが、それでも多くの人間は領主に反抗したり逃げたしたりしようとはしなかった。捕まえられてみせしめに殺されたりする事も怖れていたが、それ以上に他の生き方を知らなかったのだ。

腹にたまらない薄いスープとパン、隙間風で冷え込む寝床は、マックスの旅の中でもひときわ惨めな一泊のうちに数えられたが、翌朝その家をでる時に、彼は旅籠に三晩泊ったよりも少し多い額を渡してやった。本当はひと夏中の食料をまかなえるほどの金を置いて行くことも可能だったが、そんな事をすると生活のリズムを壊し、村での彼らの立場を難しい物にする。

「可能なら、これで少し精のつく物を買って食べなさい。この夏を乗り切る事ができるように」

昨日とはうってかわって、ペコペコと頭を下げるジャコと女房に礼を言うと、馬にまたがって彼は隣村の蹄鉄屋を目指して去っていった。

城下

「参りましょう」

ザッカは小屋の扉を開けると静かに外に出た。騒がしい小路の押し合いへし合いした小さな家の一角だった。一人の貧しそうな神父と未亡人のような服装の女が歩いていても、興味を持って立ち止まるものはない。埃っぽい小路をガラガラと荷台が通り過ぎ、人々は大きな声で語り合っている。活氣のある通りだった。

ラウラは道ゆく人の服装に目を留めた。埃っぽく擦りきれた少年たちの上着。彼らは靴を履いていなかった。女たちのスカーフやショールも色あせてくたびれていた。もう何年も同じものを使い続けているのだろう。後払いを懇願する声、商品の値段に文句を付ける輩、道の脇にうずくまるやせ細った老人。彼女は身震いした。

子供の頃、ラウラは城下で育った。いつもお腹をすかせていた。とくに両親が病に倒れ、収入が途絶えてからは、それはひどくなった。家に家主が怒鳴り込み、金目のものを奪い取っていった。

「お医者様を呼んでくるから」

そういう幼いラウラに母親は首を振った。

「無理だよ。お医者様はお金持ちの所にしかいかないのだから」

ほどなくして両親は相次いでこの世を去った。叔父と叔母がやってきて、そそくさと葬儀を済ませた後、家の中をかき回し残っていたわずかな金を持っていった。父親の肉屋はすぐに誰かの手に渡った。その人は叔父に何かを支払っていた。

葬儀の間だけは、叔父の所で一緒に食事をする事を許された。その

家の子供になるのだと思っていた。しかし、叔父たちはラウラを養う余裕などないと言った。なんという心ない冷たい親戚なのだろうと、彼女は思っていた。

しかし、十二年ぶりに街の様相を見れば、叔父たちが必死だった事も理解できる。荒んだ街だ。あの塀の向こう側には、絹と羽毛に包まれた豊かな暮らしがある。先程まで彼女が身につけていた綾織りの緞子はこの人たちの何年分の収入の価値があるのだろうか。

水路の工事現場は、隠し扉のある家からほど遠くないところにあった。サン・マルティヌス広場を抜けてしばらく歩き、堀沿いに進むとやがて二十人ほどの男たちがわずかな肌着だけを身に着け、泥の中に半ば埋まりながら作業している場所に来た。その半分ほどの数の牛馬が、のろのろと荷を引いているが、水に足を取られてなかなか上手く行っていないのが見て取れた。お互いに声を掛けあいながら作業する男たちは、脇に積み上げられた岩石を組み合わせながら器用に新しい水路を作り出しているのだが、全て人力と牛馬の力によるもので、その進み方はゆっくりだった。

「これはザッカ殿」

一番大きな声を出していた男が宰相の姿を認めた。彼は、何かを相方の男に囁くと、彼らから離れてザッカとラウラの側まで歩いてきた。残った男たちは、そのまま作業を続けた。

「宮廷用の服を脱ぎ、そなたも泥の中で働く事になったのか、ウルバンよ」

ザッカは髭をしごきながら訊いた。

「へぇ。上から監督しているだけでは、なかなか指示が上手く伝わりませんで。それに今は、一人でも多くの力がいる。ここの工事が上手くいけば、先は少し楽になるはずですから。なんですか、今回は。遅れについての報告は昨日したはずですが」

「そのことではない。工事の遅れのことよりも、安全に氣を配れ。もし、ここが崩れて大事故でも起きると、熟練した作業員を多く失う事になる。そうなると工事はもっと遅れるからな」

水路の建設と言われて、ラウラはもっと簡単な作業を思い浮かべていた。先に土を堀り、水が入ってくるのはその後だと。ザッカの説明によるともちろんそうする場所もあるが、水路を作る時には、まず自然の地形を鑑みてもとの水系を利用し作業するというのだった。自分たちの工事に都合のいい乾いた場所に水路を造っても、何年かするうちに水が枯れてしまう事がある。それは大地に水のヘビの通っていない所に水を流そうとするからで、そうなると何年もかかった大きな工事が無駄になってしまう。だから、水路は必ず水のヘビの場所をわかっている専門家のプランに従うのだと。

「あの男は、この国で一番の『水のヘビ使い』なのですよ」

ザッカは、視察を終えてもと来た道を戻りながら、ラウラに事情を説明する時に多少詩的な言葉遣いをした。彼女は頷いた。今回迂回される水路はずっと山まで通すはずであった。工事は始まったばかりとは言え、これだけの工事をしながらのことだ、いったいいつになったら出来るというのだろう。

「心配ありませんよ。現在は専門知識が必要とされる工事なので、あれだけの人間でやっていますが、もう少し楽な局面では村から人足の

供給を受けて一斉に作業させる事になっています」
「その人足たちとはどのような方々がなさるのでしょうか」
「普通は村の農民です。それに、力仕事を求めている人びとがいます。農家の次男坊、三男坊など、親の仕事を引き継げなくて手工業も手につけられなかった男たちが仕事を求めて集まってくるのです。そうした男たちには賃金を払い、農民たちの場合はこの作業と引き換えに年貢を減らすわけです」

それからしばらく言葉を切って、通りの向こう側をじっと見つめた。その奇妙な様子に、ラウラは首を傾げた。彼が言葉をつないだ。
「そう、仕事のないものには、手遅れになる前に仕事を与えなくてはならない。食べるものを買えなくなってからでは遅いのだ。貧しさは悲惨さを呼ぶ」
街が活氣に溢れているのに、その北の一角だけは人びとが近寄ろうとしないためにがら空きになっている空間があった。石畳の敷き詰められた灰色の一角だったが、人ひとりいない割に道は薄汚れて湿っぽかった。そしてその奥、ラウラからはよく見えないあたりにわずかに人の声のようなものが聞こえていた。
「あれは……」
彼女は戸惑ってザッカの顔を見た。
ザッカはしばらく黙っていたが、やがて髭をしごきながら言った。
「さよう、あなたはこの国の光の部分をよくご存知だ。であるならば、影の部分を見ていただくのも決して悪い事ではありますまい。悲惨な事に直面する勇氣はおありでしょうな」

彼女は不安に満ちてザッカの顔を見ていたが、彼はラウラの返事を待たずに歩き出した。
「こちらへ」
暗い通りを抜けると、全く違う光景が姿を現した。その通りはひどい悪臭がした。思わずラウラは両手で鼻と口を覆った。ザッカは口の端でわずかに笑った。
どこからともなくうめき声が聞こえる。

「あ、フランチェスコ様」
老いしわがれた声がし、振り向くと、よろよろとした薄汚れた老人がザッカの方に歩いてきていた。
「ハンスか、どうした」
ザッカはその男に声を掛けた。ラウラはフランチェスコというのがここでのザッカの偽名なのだと理解した。

「例のミリアムが昨日亡くなったんでさあ。三日ほど前に隠者のドメニコ様に終油の秘蹟をお願いしたんだが、お忙しくていまだにいらしていただけていないんで。このままでは腐りだしてしまいますわな」
「わかった。行こう」
それからラウラの方に向いて言った。
「奥方さま。申し訳ないが、ご同行願えませんか。辛いものをお見せする事になるかと思うが、あなたをこのままこの小路でお待たせする事は危険で出来ませぬのでな」
「わかりました」

彼女は、ザッカが躊躇せずに向かう方へと付いていった。ひどい匂いはもっとひどくなる。ハエがやたらと飛んでいる。ハンスと呼ばれた老人は足を引きずっている。よく見るとその裸足の右足のくるぶしの辺りがひどく化膿してウジが湧いているのがわかった。

小路の向こうには、家はなかった。代わりにボロ板を寄せ集めたような醜い小屋が何十軒も押し合うように建っていた。本当は今にでも崩れてしまってもおかしくないほどに傷んでいるが、隣の同じような小屋の壁と支えあってようやく形状をとどめているのだった。ひどい匂いはますますひどくなったが、あまりにも長く嗅いでいたので彼女は既にほとんど辛さを感じなくなっていた。

それよりも目にしているものの方がずっと辛かった。多くの人たちがうずくまってこちらをぼんやりと見上げていた。体中にハエがたかっているが、それを追いもしなかった。ハンスのようにあちこちに傷があってそこに蛆がたかっている。空腹に何も考えられなくなった諦めきった表情。

ハンスとザッカは小路の奥の小屋の一つに入っていった。ラウラは思わず口元を手で塞いだ。それまでもひどい臭いだと思っていたが、これほどの強い悪臭ではなかった。深く息をしなければ倒れてしまいそうだったが、そうすればこの小屋に溢れる苦しさを体の中にいれる事になる。瞳を閉じて震えが止まるまでしばらくそうしていた。

ゆっくりと瞳を開けると、暗闇に慣れた目に恐ろしい光景が浮かび上がった。骨が浮き上がった痩せた女の遺体が寝台に横たわっていた。大きく開いた口からは歯がにょきっとはみ出していた。いくつもの歯が抜けてしまっているので、残った歯は牙のように見えた。体が妙な具合にねじれて事切れている所を見ると、決して楽な最後ではなかったのだろう。ガリガリの腕や顔にただれた斑点がたくさんあった。誰か仲間が閉じてやったのだろう、少なくとも瞼だけは閉じられていた。

「この聖なる塗油により、慈しみ深い主キリストが、聖霊の恵みであなたを助け、罪から解放してあなたを救い、起き上がらせてくださいますように」

ザッカは全く平然としてミリアムの遺体に聖油を塗り、聖句を唱えた。だがその声の深い響きから、ラウラは彼が周りの人びとが言うようなただの冷たい人間ではない事を感じた。彼はこの事態に何も感じないのではない。彼はこれに慣れているのだ。黙って目を閉じて立ち会うハンスも、ここにいる全ての人びとが、この生活を毎日続けているのだ。彼女は、取り乱したりせずにこの状況を直視しようと思った。

「どうお思いになりましたか」

暗い通路の中で、ザッカの声が響いた。

「ひどい、あまりにもひどい。知りませんでした。あんな風に苦しむ人たちがいるなんて。私のお城からいただいているお手当で何かできないのでしょうか」

カツンという靴の音がして彼が止まった。

「あなたのお手当で何かできる程度のことならば、私の報酬で事態を変えていますよ」

ラウラはうつむいた。ザッカが再び歩き出したので、ラウラも後を追った。

「国王陛下はこの事をご存知なのですか」

「ええ。私がお伝えしましたから。しかし、陛下は自らの目でご覧になったわけではない。それに、ひどい状態なのはあそこだけではない。ルーヴランの全ての貧民街をなんとかすることは、いまの財政では無理なのです」
「でも、せめてお医者様だけでも」
　ザッカは足を止めた。そしてしばしの沈黙の後に答えた。
「彼らは貧民街になど絶対に足を踏み入れません。あそこに行くのは聖職者、しかも托鉢僧だけなのです」
ラウラは息を飲んだ。
　ザッカは低い声で言った。
「バギュ・グリ殿」
「はい」
「あなたには勇氣がある。先ほどのあなたのしっかりとした態度には感銘を受けました」
「宰相様……」
「あの困難に直面することのできる貴人は多くありません。この壁の向こうでふやけたパンのような生活をしている人間は目が曇っているのです。国力の衰えも民の疲弊も見えなくなるのです」
「私にお手伝いできることがありましたら、何でもいたします。どんなことでも」
「それは頼もしい」
暗闇で表情は見えないが、ラウラはザッカが笑ったように感じた。
　しばらく無言で歩いていたが、やがて彼は再び口を開いた。
「私がなぜ政治の世界に足を踏み入れたか、ご存知ですか」
「いいえ」
「神の家こそが、彼らを救うと信じて修道院に入りました。しかし、祈るだけでは何も変わらない。私は神が奇跡を起こすのを悠長に待つのはやめたのです」
「宰相様……」
「だが、この国を変えるためには決定的に金が足りないのです。王族のくだらない贅沢をやめさせて倹約しても、焼け石に水だ。この国は、もっとコンスタントに金を生み出す方法を考えねばならぬのです。グランドロンがあれほど大胆な改革ができるのは、国王の覇氣の問題だけではない。かの国はわが国よりもずっと富んでいる。それどころか、ルーヴランはここ百年の間に、金を生み出す土地をグランドロンに奪われた。マールも、ペイノードも！　そして、それだけでは飽き足らずに我々の息の根を止めんと軍備を増強しているのです。そうなったら国中に先ほどあなたが見てきたような絶望の中で死んでいくものたちがあふれかえることになる」
　ラウラは震えながらザッカの言葉を聞いていた。
「マールやペイ・ノードを奪い返す必要があると、グランドロンと戦争をしなくてはならないとお考えですか」
「ええ。だが、我々の状況を変えるには、失われたルーヴラン領を取り戻すだけでは足りない」
ザッカは厳かに言った。思い詰めた表情だった。彼女はとても不安になった。

そのまま僧衣を着た男は黙ってしばらく歩いた。ラウラが先ほどの話題は終わったのだと思い出した頃、突然彼は立ち止まって言った。窓から光が入ってきて、ザッカの表情が見えた。
「わがルーヴラン王国の宝の山がどこにあるかご存知ですか」
「宝の山？」
「十分な埋蔵量のある金山、豊富な鉄鉱石、そして、南へ向かう四輪車の通れる峠のある土地」
知識を試されていると思った。彼女の知るかぎり、ルーヴランにはそのような土地はなかった。
「そのようなルーヴランの土地を私は知りません。でも、グランドロン王国に属する国なら……」
《氷の宰相》は口先だけで笑った。
「その土地は？」
「フルーヴルーウー伯爵領……」
彼女は不安な面持ちでザッカを見つめた。
「そうです。初代フルーヴルーウー伯爵夫人が誰かはご存知ですよね」
「はい」
ラウラは養女で実際に血のつながりはないが、フルーヴルーウー伯爵夫人となったジュリアはバギュ・グリ侯爵令嬢だった。そして、夫のフルーヴルーウー伯爵は、伯爵位をグランドロン王から授けられたが、もともとはジュリアの馬丁でありルーヴラン生まれであった。
「あなたのお父上バギュ・グリ候は《男姫》ジュリアの弟であるバギュ・グリ候マクシミリアン一世から数えて六代目。フルーヴルーウー伯爵領を継ぐ資格は十分にあります。そして、現在、伯爵位は空位だ」
先代伯爵、フロリアン二世が不慮の死を遂げてから四半世紀が過ぎた。伯爵は毒殺されたのではないかと言われている。幼児であった伯爵の長男が伯爵位を継いだが、その新伯爵はそれから数日後に行方不明となった。
「表向きはどこかにいるはずの伯爵の代わりに前伯爵の叔母の婿ジロラモ・ゴーシュ子爵が代官として統治し、そして金山は王が直轄する形になっている」
ザッカは冷たい目をして髭をしごいた。
ラウラは青ざめた。
「どうなさるおつもりですか」
「奪回するのです。バギュ・グリのものはバギュ・グリに、ルーヴランのものはルーヴランにね」

『カササギの尾』

今日の午後にはルーヴにお着きになるでしょう、そう言われてマックスは大きく息をした。旅、それはいつも危険と隣り合わせだった。今回も何度か下手すれば命を落としかねない目に遭ってきた。街道の十字路では多くの人びとが捧げものをして旅の無事を祈るのに倣ってきた。十字路の精霊への捧げものとはいくつかの矛盾をはらんでいる風習だ。唯一の父なる神とその御子に無事を祈るなら十字路ではなくて聖堂で祈ればいい事だ。それに、たとえ捧げものをしても多くの旅人があいかわらず危険に晒されている。

だが、十字路の精霊や森に棲む何かは、救世主がこの世に送られてくるずっと以前から贈り物を強要し、人びとはそれに丁寧に応えてきた。捧げものをしても、神に祈っても、危ない目には遭う。それすらもしなかったらどんな事になるやら。ギリシャ的演繹法を叩き込まれたマックスですら、十字路や聖堂では祈り、わずかな捧げものをする。人とはそういうものだ。彼は自嘲した。だからこそ、ひとつの旅が無事に終わる事を彼は喜ぶ。

安全な街で、心地よい城で、運良く仕事をもらえれば、何ヶ月かに渡って贅沢で楽な日々が約束されるだろう。彼はしばらくそれを幸福に思うに違いない。けれど、だからといってどこかの土地に未来永劫留まりたいとは思わなかった。しばらくすると彼の心は再びあの《シルヴァ》、暗く危険な森へと誘われて行く。リュートの優雅な響きや饒舌な男たち、浅はかで贅沢な女たちとの退屈な時間に疲れてくるのだ。もっと遠くに行きたい。もっと他のものが見たいと。それを知りつつ、彼は次第に往来を増す道を急ぐ。馬は主人の逸る心を感じるのか小走りになる。

やがて馬は開けた丘の上に飛び出した。彼は眼下に広がる壮麗な光景に思わず息を飲んだ。赤茶色の屋根瓦の家々の向こうに立派な城が堂々とそびえ立っていた。薄緑の花崗岩の壁、オレンジ色の屋根瓦にたなびく王家の旗。ルーヴラン王国の王都ルーヴだった。

彼はすぐに王城を訪ねたりはしなかった。長旅で疲れ、持ち物と自分自身がみすぼらしくなっているのはわかっていた。仕事をもらう時に大切なのは、相手に足下を見られない事だ。仕事が欲しくて仕方のないように見られてはならないし、重要でない人物と判断されてもならなかった。というのは、彼がそうでなくても年若く軽く見られがちであったからだ。それに王城に住んでいる人たちというのは、経験や知識など人の内部にあるものよりも、衣装やどれだけ有名な人を知っているかなどの表面的な事に囚われている事が多い。今マックスに必要なのは、旅籠と公衆浴場で休み、それからルーヴランで流行しているしゃれた衣装を購入する事だった。

大通りを進むと、ちょうど外壁と城との真ん中ぐらいのところに大きな広場があった。サン・マルティヌス広場である。ここを起点に旅籠探しを始めるのが効率的だろうと思った。彼はまず城を正面に見て右手の道を進んでみることにした。

その道は袋小路になっていて、しかも狭く複雑な迷路のようだった。彼は歩きながらいぶかしげに小さな家の間を覗き込んでいたが、つい

には馬の両脇についた荷物の幅が道幅ぎりぎりとなってしまい、もと来た道へと引き返すことに決めた。が、実のところその頃には自分がどこにいるのかまったくわかっていなかった。

「旅のお方。どちらへいらっしゃるのかね」

声に振り向くと、質素ながらもわりときちんとした服装をした青年が立っていた。

「初めてルーヴに来たんだ。心地が良くてあまり高くない旅籠を探しているんだが、どうやら間違ったところを探して迷ってしまったみたいだ」

率直にマックスが答えると青年はからからと笑った。

「ここでよかったですね。もう少し向こうにはぞっとしない光景の貧民窟があって、とんでもない病をもらうことだってありますからね。もっともここにも旅籠はありませんが」

そういうと、すっと馬の手綱をとり、右側の道へと誘導した。その動きがとても自然で、馬もおとなしく従ったので、マックスはこの男が馬を扱いなれた、多分従僕のような仕事をしている人物なのだろうとあたりをつけた。

「市場からさほど遠くないところに、私どものいきつけている『カササギの尾』という旅籠がありましてね。面倒見のいい人好きのする女将と、無口だがうまいものを食わせてくれる主人は、旦那のお氣に召すと思いますよ。まずはそこに言って、ご自分の目で確かめられてはいかがですか」

マックスは頷いた。長い旅の間に身につけた勘によって、彼は自分をだまそうとする人間の誘い方と、好意のある人間の誘い方をだいたい見分けられるようになっていた。その『カササギの尾』がいい旅籠かどうかも実際に自分で見てみればだいたいわかる。もし二三日逗留してよくないと思ったら、それから別に移ればいいことだ。そう思って、まずは青年についていくことにした。

「ありがとう。マックスと呼んでくれ。君は立派な家に勤めている従僕のように見えるけれど、僕の予想はあたっているかな」

そう訊くと青年はにっこりと笑った。

「その通りです。私はマウロと申しまして、お城の召使い、主に馬周りの仕事をしているんでさ」

「ほう。だったら、僕がうまく仕事をもらえたらまたお城で再会できるかもしれないね。ときに僕はどんな人間に見えるかい？」

マウロはじっと彼を上から下まで見た。お城で仕事をもらうと言っていたけれど、自分のような召使いの仕事をするようには見えない。

「難しい問いですな。旦那は商人には見えないし、遍歴職人でもなさそうだ。かといって、王宮の騎士に加えていただこうとするお金持ちの貴族さまならこんなところにいないでしょうし」

彼は笑った。

「実は、王女さまの教師を探しているという話を聞いて、やってきたんだ」

マウロはぎょっとした顔をした。

「旦那が？　そんなにお若いのに王宮の教師の資格をお持ちなんですか？」

「ああ、実はそうなんだ」
「でも、だったら『カササギの尾』なんかじゃなくて、貴族さまのお泊まりになる『白鷺亭』にご案内しないと」
「いや、そういうところには行きたくないんだ。もし、仕事をいただいたらその手の連中とばかりつきあうことになるだろう？　僕はどちらかというともっと街の実際に生活を支えている人々の間で、この国のことを見聞きしたいんだ」
　マウロはマックスのことをじっと見た。
「変わった旦那だ。達者に話されていますが、ルーヴランのお方ではないのでしょう。どこからおいでなさった」
「僕はグランドロン人だ」
「というと、姫さまとご縁談の進んでいる王様をご存知なんで」
「まあ、接見はしたけれど、話をしたことがあるって訳じゃない。師の付き添いで祭儀の数合わせで行ったけれど、ずっと頭を下げていただけさ」
「率直なお人ですね。いくら自慢しても私にはわかりませんのに」
「僕は口先の嘘で世の中を渡ったりすることが嫌いなんだ。必要があれば、若干のはったりは使うけれどね」
　そんな話をしている間に、二人は迷路のような小路を抜けてサン・マルティヌス広場に出た。市場が立っていて騒がしかった。肉や魚の血の臭いがして、足下には野菜の切れ端や犬の糞が転がっていた。人々は喧噪に負けないように大きな声で怒鳴り合っていた。
　彼はマウロと馬について市場を横ぎり、別の小路へと入っていった。すぐに黒と白の尾の長い鳥の看板が目に入った。賑わっている料理屋からはスープのいい匂いがしていた。マウロは扉から顔を突っ込んだ。
「いらっしゃい、マウロ！」
奥から声がして女主人がこちらへやってきた。
「マリアンヌ！　お客さんだ。心地が良い宿をお探しなんだと。部屋はあいているかい？」
「ああ、もちろんだとも。まだ日も高いからね」
「マックスの旦那、部屋を見られますか？　その間、私が馬を見ていますよ」
マックスは首を振った。
「部屋は見なくてもいい。君が保証するなら、清潔に決まっている」
　二人のルーヴラン人は顔を見合わせてから、満足そうに笑った。グランドロン人がルーヴラン人に嫌われるのは、すべてを自分の目で見てコントロールしたがり、あらゆることにケチを付けたがるからだ。だいたいにおいて、ルーヴランの宿はグランドロンのそれほど清潔ではないことが多い。だが、それを指摘して何になるのだというのだろう。多少しわのよったシーツと、このいい香りのする料理を天秤にかけなくてはならないなら、マックスは喜んでルーヴランの平均的旅籠を選ぶだろう。
「ところで、マックスの旦那。ずいぶん荷が軽いようですが、後からお荷物が着くんですか？」
マウロが馬から外した荷物を運び入れながら訊いた。
　マックスは少し微笑んで答えた。
「いや、荷は届かない。その代わりに、僕はまともな服装を揃えなきゃならないだろうな。マウロ、いい仕立て屋と靴屋を知っているかい？」

旅籠の女主人マリアンヌとマウロは再び笑った。こうしているうちに、彼らと以前からの友人のようにすっかりと親しくなってしまったのだった。

旅籠『カササギの尾』には、母屋の上にごく普通の客室もあったが、流行っている居酒屋ゆえ毎晩の酒盛りで安眠が妨げられる怖れがあるとマリアンヌは告げた。マックスは長期滞在するつもりだったので、離れの部屋を借りる事にした。居酒屋の裏の小路を少し進んだ奥にあって、通りの喧噪からわずかに離れただけなのに驚くほど閑静に感じられた。寝室兼居室は暖炉で暖かく、もう一部屋はその火で簡単に食事なら自分で煮炊きもできる小さい台所のようになっていた。これなら朝、暖かい湯で顔を洗う事もできる。マックスはこの新しい住居がたいそう氣にいった。

とはいえ、自分で料理するつもりには全くなれず、『カササギの尾』に早速戻って、親爺の自慢のスープを頼んだ。この居酒屋がいつも混んでいるという理由はすぐにわかった。ここにいる間に太ってしまうかもしれない。マックスは思った。

二日明けた朝、マックスは公衆浴場へと向かった。都市の浴場は貴族から乞食まで広く開放されている。もちろん乞食が自分で代金を払えるわけではない。公衆浴場は月に一度、開放されて貧民や乞食など普段は入れない人びとも自由に入場できる。この費用は貴族や街の富豪たちの喜捨でまかなわれており、入場する時には主には既に死亡している寄進者の魂の救済の祈りを唱えることになっていた。開放日は浴場は汚れて得体の知れない者でいっぱいになるので、自分で払って楽しみたい客は行かない。そして、その翌日も、まだ前日の奇妙な臭いが残っているという理由で、ひどく空いているのだった。彼がわざわざ選んだのはこの朝だった。

「変わったお客さんだね。わざわざ今日を選んでいらしたんですかい」浴場の親父は目を丸くした。

「そうだ。少し念入りにしてもらいたいんでね、君たちに時間がたっぷりある方がいいんだ」

「なるほど。それでは、まずこちらからどうぞ」

親父はトビアスという名の青年にマックスを案内するように言った。トビアスはかしこまって彼を奥へと連れて行った。

脱衣室で衣服を脱ぎ、まずはトビアスにカミツレの入った灰汁をかけてもらってからマッサージを受ける。全身をくまなく揉み解してもらい旅の間に強ばった筋肉を弛緩させる。それから小部屋の寝台に横たわる。すぐ側の真っ赤に熱せられた石に水が掛けられると、部屋は蒸氣でいっぱいになる。しばらくはそうしてサウナで汗を流す。トビアスはその間も白樺の細い枝を束ねたものでマックスの全身の皮膚を叩いていた。乾燥しささくれ立った手足の皮膚も丁寧に削ってもらう。

サウナの次は洗い場だ。上級のコースを頼みさらに割増賃も払ったので、トビアスは高級な石けんを使い、身体と髪を丁寧に洗っていく。

「ずいぶん絡まっていますね、旦那さま」

「悪いが貴族の頭みたいにしてくれ」

マックスは頼んだ。トビアスは無理難題を言われると奮い立つ性質ら

しく、絡んだ客の髪を狂ったように梳いて、丁寧に洗い、どこに出ても恥ずかしくない状態にしてくれた。そういう訳で、彼がさっぱりして階下に降りて行くと風呂屋の親父すら驚くほど清潔で綺麗になっていた。

浴場の次に訪れたのはマウロとマリアンヌに薦められた仕立て屋で、マックスはここで何着かの登城用の服をこしらえた。彼は一点は式典の時にも着用できる袖がふくらみ、襞もたっぷりある絹織物で、色は深い青にしてもらった。本来はもう少し明るい青が好きなのだが、式典ともなると服装にもうるさい輩が多いだろうから、わずかでも高貴に見える色合いにしてもらったのだ。当然染色の手間がかかるので値段も張る。残りの数着は少し色合いの違う明るい青の上着と、流行のスカーレットの毛織物の上着。これに脛までの麻のズボン、白いシュミーズ、絹のタイツに、滑稽なほど先の尖って反り返った靴など、宮廷で必要な服装を取り揃えた。

こうした馬鹿げた服装は値段も張るが、とにかく布の量が多くて持ち運びが不便だ。だから彼は旅の間中持ち歩くことよりも、こうして必要な時に仕立てることを好む。これらの金額があれば、旅では一ヶ月以上楽しい思いが出来るだろう。だが、しかたがない。この衣装なしでは王女の教師の職は手に入らないだろうから。彼は王宮を訪ねる段取りについて考えはじめた。

（初出　二〇一四年八月　書き下ろし）